平成26年7月26日

印旛郡市文化財センター第18回遺跡発表会

鏡と信仰 - 和鏡の成立と展開 -

國學院大學学術資料センター

内川隆志

はじめに

弥生時代に大陸から将来された青銅鏡は、単に人の姿を映すための実用品ではなかった。墓に副葬し僻邪の具として、また権力者の威信財や祭祀の道具でもあったことは、多くの発掘調査によって明らかにされている。古代、自然に神を見いだした修験者は深い山の頂に鏡を献げ、世の安寧秩序を祈念すべく山や巌に降臨する神々に奉献した事例も知られる。法隆寺など大寺院の造立に際し、塔心礎に埋納される舎利や鎮壇の荘厳具として埋納される例も知ある。平安の世に至って神仏に祈りをささげる人々はその主要な信心、奉献の具や死者に手向けられた副葬品として鏡を多用したのである。末法思想に起因する経塚への埋納、社寺への奉献などによって残された膨大な鏡がその証である。

一方、信仰の具としての側面だけでなく、工芸品としての美しさにも注目したい。ことに平安時代後期の国風文化の中で誕生した和鏡の美しさは、中世全般を通して多用な変化をとげて継続し、近世に至っては、柄鏡の出現によって自由奔放な独自の絵画的世界を展開する。

弥生時代の鏡

弥生時代前期末葉、遼東半島に起源を発し朝鮮半島で製作された多鈕細文鏡が北部九州にもたらされ、畿内に伝播した。福岡市吉武高木 3 号木棺墓や佐賀県唐津市宇木汲田遺跡、福岡県小郡市若山遺跡、大阪府柏原市大県、奈良県御所市名柄字宮などが代表的な遺跡である。弥生時代中期後半には、伊都国と推定される福岡県前原市三雲遺跡や奴国の推定地である福岡県春日市須久岡本遺跡からは、前漢後期に比定される多数の舶載鏡が発見されており、特に北部九州では大型異体字銘帯鏡が多量に副葬されることから楽浪郡との関連性が指摘されている（註1）。弥生時代後期には近畿、瀬戸内、山陰などに一般庶民とは異なる地域特有の大型の首長墓がつくられ、前方後円形の墳丘墓へと変化し古墳時代を迎える。これらの墳墓からは、故意に鏡を打ち破った破砕鏡の事例が認められる。鏡を割ることで死者との決別が成立していたことを示唆するものである。3 世紀前後に構築された福岡県糸島市平原遺跡 1 号墓（註2）からは、40 面にのぼる大型の内向花文鏡、方格規矩四神などの破砕鏡が副葬されている（2006 年国宝指定）。鏡には直径 46.5cm の内行花文鏡 5 面が含まれており日本最大を誇っている。その他、方格規矩鏡 32 面、き龍文鏡 1 面、内行花文鏡 2 面が含まれる。40 面中 32 面の方格四神鏡すべてが日本製であり、残りの 5 面の大型内行花紋八葉鏡、1 面の内行花紋鏡も日本製である。つまりこの時期から既にわが国には、中国の鋳鏡を凌駕する技術が存在したことを証明する。

写真 1　平原 1 号墓出土　内行花文鏡 径 46.5 ㎝

写真 2　平原 1 号墓の埋葬施設

古墳時代の鏡

古墳への副葬

弥生時代各地に認められた特徴的な墳丘墓は姿を消し、前方後円墳が登場する。定型化した大型前方後円墳として最初に築造されたのは奈良県桜井市箸墓古墳である。前期古墳の埋葬施設は、弥生時代後期以降に出現した木槨や石槨が定型化された前方後円墳に採用され、長大な竪穴式石室に割竹型木棺を納めたものとなった。副葬品としては三角縁神獣鏡をはじめとする鏡が中心となる。3 世紀後葉に築造された京都府木津川市椿井大塚山古墳では、多数の鉄製武器・武具と共に三角縁神獣鏡 32 面を含む 36 面もの鏡が出土し、近年では、奈良県天理市黒塚古墳（写真 3）では副葬された 34 面の三角縁神獣鏡が発見されている事例などが記憶に新しい。このように鏡を納棺する習俗が古墳時代前期には西日本を中心として急速に拡がったのであるが、古墳時代中期以降になると副葬品としての鏡の数は急激に減少する。

写真 3　黒塚（奈良県天理市　３世紀後半）
棺内の副葬品の様子（右上）と出土した 34 面の鏡。うち三角縁神獣鏡は 33 面、画文帯神獣鏡は 1 面を数える。画文帯神獣鏡は、棺内に入れられ、三角縁神獣鏡は、全て棺外に置かれていた。

近つ飛鳥博物館　2009 『卑弥呼死す大いに冢をつくる』 大阪府立近つ飛鳥博物館平成 21 年度春期特別展図録より転載

暦年代	時代のなまえ		九州	山陰	山陽	四国	播磨	河内	摂津	山城	大　和	丹波丹後	近江	東海関東
200	弥生時代	後期	平原	西谷３	楯築							赤坂		
		終末期（前半）		西谷２										西上免
250		終末期（後半）				萩原１ 鶴尾					ホケノ山	黒田		神門３ 弘法山
300	古墳時代	１期	石塚山		浦間・湯迫	宮谷	権現山51		安満 西求女塚	椿井・元稲荷	箸墓 黒塚・中山大塚 西殿塚			東山 新豊院
		２期		神原神社		高松茶臼山		玉手９	闘鶏山	寺戸 平尾城山	桜井茶臼山・下池山 メスリ山		雪野山	高部30号墳 森将軍
		３期	免ヶ平					忍岡 松岳山	紫金山	妙見山 南原	行燈山 渋谷向山・東大寺山	蛭子山	安土	

表１　弥生墳丘墓から古墳へ　各地の動向　大阪府立近つ飛鳥博物館平成 21 年度春期特別展図録より作製

巫女の鏡

鈴鏡（写真 5）は、仿製鏡の縁辺部に鈴を接続したもので、その分布は、東日本に偏在する。分布状況の類似と鈴付きであることから、鈴付の馬具との深い関係性が指摘されてきたが、その時期的な位置づけに関しては、鈴付きであること以外、古墳時代の仿製鏡の系列とその属性の範疇から出るものではない。鈴鏡でもっとも多い獣形文鏡類は仿製鏡の中でも最終段階の獣帯文鏡と共通する文様である(註 3)。光り輝く鏡に音を付加した鈴鏡はシャーマンの使う術具であったのだろうか。群馬県太田市塚廻 3 号墳（写真 4）の出土例に見られるように腰に鈴鏡を提げた巫女埴輪の出土例もいくつか知られている。

写真 4　巫女埴輪（群馬県太田市塚廻 3 号墳）
6 世紀　『国宝武人ハニワ、群馬へ帰る！　これが最後、東と西の埴輪大集合』 2009　群馬県立歴史博物館より

写真 5　六鈴獣形文鏡（國學院大博物館蔵）

祭祀に用いられる鏡

大場磐雄は、「神道考古学の体系」における祭祀遺跡・遺物の分類(註 4)を示した（表 2）。ここには「自然物を対象とする遺跡」が詳細に分類され、これらの場所からの考古遺物の出土をもって祭祀遺跡の分類をおこなっている。

古墳時代を中心とした神まつりの場の跡である祭祀遺跡は、宗像沖ノ島（写真 8）は別格として西日本以東に顕著に認められ、その立地に関しては名山大岳や神奈備山、岩や池、沼、川、滝といった水辺や海、古社の境内地、集落内など多岐に及んでいる。祭具としては土器や土製品、鉄製品、鏡、玉、剣を模った石製模造品などと共に小形の青銅鏡などが用いられる。兵庫県明石市藤江別所遺跡(註 5)では、4 世紀後半に遡る井泉に入れられた車輪石や勾玉と共に素文鏡、重圏文鏡、櫛歯文鏡、珠文鏡など 9 面の小型仿製鏡が発見されている。神奈川県相模原市勝坂有鹿谷祭祀遺跡(註 6)（写真 6）では湧水を祀った多数の石製模造品や土器類と共に珠文鏡、櫛歯文鏡、変形六

【祭祀遺跡】
A　遺跡を主とするもの（祭祀の対象の明らかなもの）
1　自然物を対象とする遺跡
山　岳　浅間型（富士型）・・・・・・・高山や火山のように遠方から畏怖崇敬するもの
神南備型（三輪型）・・・・・・・集落に接近し、親愛の念をこめてまつるもの
巌　石　石神　立石型・・・・・・・・・・・・・高く聳立するもの
飯石型・・・・・・・・・・・・・

写真 6　勝坂有鹿谷祭祀遺跡（神奈川県相模原市）出土の祭祀遺物（小型仿製鏡・石製摸造品・土師器ほか）

写真 7　建鉾山（福島県白河市）と出土祭祀遺物（小型仿製鏡・石製模造品類）　6 世紀

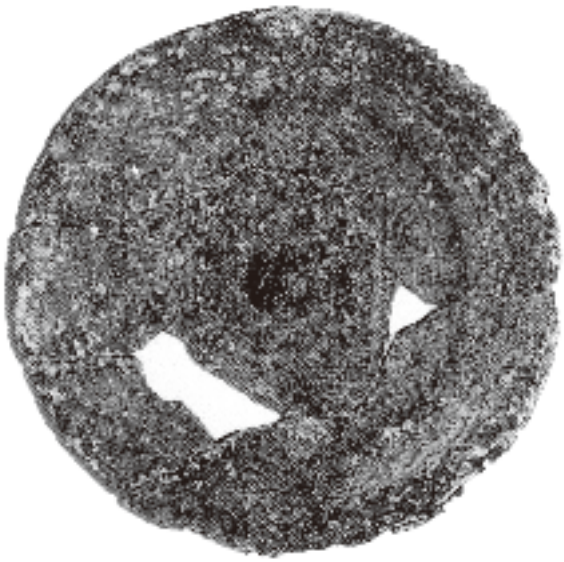


写真 8　沖ノ島岩上祭祀（21 号遺跡）と変形方格乳文鏡（16 号遺跡）

宗像沖ノ島は、4 世紀から 9 世紀の間、継続して祀られた国家的祭祀遺跡として知られる。4 世紀に選ばれた祭りの場は巨岩の上に石で区画を作り、鏡等神への奉献品を置いた。17 号遺跡では、21 面もの鏡が確認されている。6 世紀には祭祀の場が岩上から岩陰へと変容する。　宗像神社復興期成会 1958『沖ノ島－宗像神社沖津宮祭祀遺跡－』　他

獣鏡など7面の小型仿製鏡などが知られている（写真6）。福島県白河市建鉾山遺跡（註7）（写真7）は、典型的な神奈備型である建鉾山山頂付近に露出した珪質岩の母岩は、古来、神の降臨に相応しい磐座、石神とされてきた。安政3（1856）年の古図によれば、北側斜面の巨岩下は「御宝前」と記され、棚倉町馬場都々古和気神社がかつて鎮座していたとの伝承をもつ聖地であった。昭和32（1957）年、この地で石製模造品が発見されたことを発端に、國學院大學の亀井正道らによる第一次調査、翌33（1958）年に第二次調査が行われ、鏡・勾玉・剣・鎌・刀子・斧頭形、有孔円盤、小玉等の石製摸像品、その他の鉄鉾、青銅製擬鏡、鉄刀、鉄剣の金属製品、土師器、壺、高杯等の膨大な遺物が出土した。出土状況から祭祀の終了後に廃棄されたものと考えられている。また、静岡県熱海市宮脇遺跡（註8）では、大場磐雄によって神奈備形の向山を仰ぐ延喜式内社上多賀神社裏に立地する境内地から6面の小型仿製鏡が発見されている。

古代の鏡

飛鳥時代には鏡の出土件数は激減するが、奈良時代には再び隆盛を取り戻す。該期の鏡は、正倉院に代表されるように唐から将来された鏡とそれを模倣して日本で仿製された鏡を合わせて唐式鏡と呼称される。唐式鏡には円鏡の他に花形や稜形、方形などがあり鏡背文様には海獣葡萄鏡に代表される禽獣文系、鳳凰や鴛鴦、鸞を表現した双鳥文系、瑞花や花枝を描いた瑞花文系、伯牙弾琴鏡に代表される人物文系などが知られる（註9）。用途としては、鎮壇、副葬、祭祀などが知られる。平安時代前期（9世紀前半）には、唐式鏡に見られたバリエーションは無くなり瑞花双鳥八稜鏡が主流となって11世紀中頃まで継続する。

禽獣文系

大型海獣葡萄鏡

正倉院南倉第9号鏡（面径29.7㎝）・正倉院南倉第8号鏡（面径23.9㎝）・正倉院南倉第7号鏡（面径24.7㎝）香取神宮鏡（面径29.7㎝）・春日大社鏡（面径29.6㎝）・大山祇神社鏡（面径26.8㎝）などは30㎝に迫る大型鏡である。

中型海獣葡萄鏡

高松塚古墳出土鏡（面径16.8㎝）を典型とする。奈良県天理市杣ノ内火葬墓出土鏡（面径12.1㎝）は、同型鏡が17面知られている。中国西安市東郊独孤思貞墓出土鏡には、神巧２（698）年の墓誌が出土している。中型海獣葡萄鏡は、墳墓からの出土が顕著である。

小型海獣葡萄鏡

面径１０㎝前後以下の小型の海獣葡萄鏡は、栃木

寺家遺跡（面径6.3㎝）　八代神社（面径10.9㎝）　高松塚古墳（面径16.9㎝）　正倉院南倉（29.7㎝）

写真9　海獣葡萄鏡のタイプ

県日光男体山山頂出土鏡（面径 10.4 ㎝）などのように明らかに舶載品であるものを除いて、日本で踏み返されたものが多い。宮崎県美郷町神門神社伝世鏡や三重県鳥羽市神島の八代神社伝世鏡なども踏返し鏡である。また、面径６㎝前後を計る海獣葡萄鏡は、石川県羽咋市寺家遺跡鏡（５面）や奈良県橿原市四条大田中遺跡（２面）、千葉県富里町千葉松の木台２号古墳など全国に多数類例が知られる。

双鳥文系

海獣葡萄鏡の次に多いのが主文として鈕の左右に双鳥を配置する双鳥文系の鏡である。鈕の上下に禽獣二体を配置するものと花枝文・瑞雲文・鳥文を配置する鏡の二種類がある。前者に狻猊双鸞鏡、双龍双鳥鏡、双麟双鸞鏡が、後者には花禽双鸞鏡や瑞雲双鸞鏡がある。

鳥花背八角鏡（正倉院北倉３号）/ 双龍双鳥鏡（京都国立博物館）/ 瑞花双鳳八花鏡（興福寺金堂）

写真 10　双鳥文系のタイプ

瑞花文系

瑞花や花枝などの植物文のみで構成する。岡山県高梁市マゴロ経塚出土の唐花鏡（面 18.3 ㎝）、愛知県西尾市西幡豆出土の宝相華八花鏡（面径 17.7 ㎝）、岡山県笠岡市大飛島出土の唐花六花鏡（面径 9.1 ㎝）などが知られる。

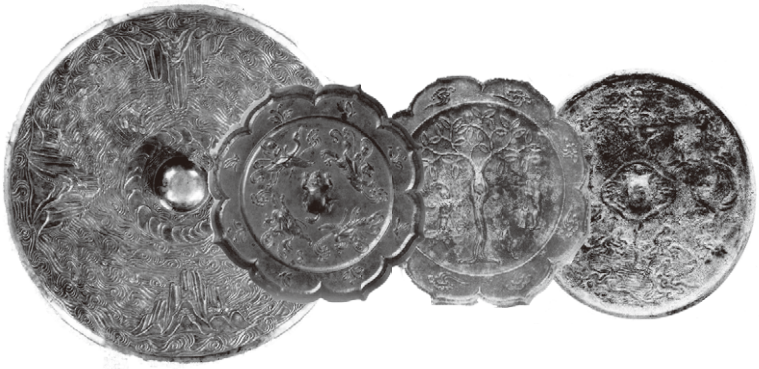
唐花六花鏡（岡山県笠岡市大飛島）/ 唐花鏡（高梁市マゴロ経塚）/ 宝相華八花鏡（西尾市西幡豆）

写真 11　瑞花文系のタイプ

人物文系

伯牙弾琴鏡

隠者の理想郷を画材としたもので、鈕を挟んで右側に一羽の鳳凰、左側に戦国時代の琴の名手である伯牙が竹林で琴を奏で、中央の蓮池からは蓮葉が立ち上がり葉上の亀が鈕となる図柄をとる。京都府木津川市綺田出土鏡（面径 15.0 ㎝）や奈良県広陵町池上木棺墓出土鏡（面径 15.0 ㎝）などが知られる。



海磯鏡（法隆寺）/ 四仙騎獣八稜鏡（長岡京市）/ 月兎鏡（富岡市貫前神社）/ 伯牙弾琴鏡（木津川市綺田）

写真 12　人物文系のタイプ

月兎鏡

月の桂樹の下で仙薬を突く兎と飛天の姿を描く。群馬県富岡市貫前神社鏡（面径 20 ㎝）が知られる。

四仙騎獣八稜鏡

内区に飛鶴に乗る神仙と獅子に乗る神仙を対峙させる構図を採用する。京都府長岡京市左京第 53 次調査等の事例が知られる。

海磯鏡

波濤と四山岳を中心に船乗し投網を行う人物や鴨、鹿などの動物を配置する。法隆寺献納宝物の 2 面は面径 46.5 ㎝、45.9 ㎝を計る大型鏡である .

漆背金銀平脱八角鏡

平脱技法による鏡背文様は、鈕を中心とする六花形と対葉形を含む団花文風の唐草文、その外びは含綬鳥、花を銜えた鴛鴦、蝶、飛鳥、鳳凰、草花、折枝、瑞雲が散りばめられる。

平螺鈿背円鏡

鏡背に螺鈿や琥珀、トルコ石、青金石などが花模様に配置される。

『国家珍宝帳』の「八角鏡一面重大三斤四両径九寸二分平螺鈿背緋絁帯漆皮箱緋綾嘶盛」に相当する。正倉院には 9 面が伝世する。

黄金瑠璃鈿背十二稜鏡 / 平螺鈿背円鏡 / 漆背金銀平脱八角鏡

写真 13　平脱・螺鈿・七宝鏡（正倉院）

奈良国立博物館 『平成 21 年正倉院展』図録、杉山博 『古代の鏡』日本の美術より転載

黄金瑠璃鈿背十二稜鏡

正倉院唯一の七宝背鏡で、銀製の鏡胎に銀板に濃緑、緑、褐などの色の七宝釉を焼き付けた部材 19 枚と、魚々子の施された三角形の金の薄板 12 枚などを貼り付け、12 弁の花弁模様を表出している。

古代における鏡の使用

舎利埋納鏡

塔の心礎に埋納される舎利の荘厳具として法隆寺と滋賀県崇福寺五重塔にその事例が知られる。法隆寺の例は銅製蓋の下に径 23 ㎝、深さ 24 ㎝の円錐形埋納孔

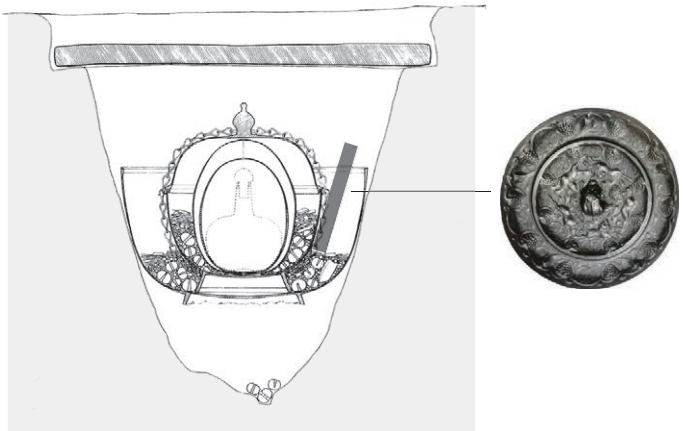


図 1　法隆寺舎利容器出土状態

が掘られ青銅大碗の上に鍍金青銅合子、卵形透彫銀容器、卵形透彫金容器、銀栓ガラス瓶と共にガラス玉、真珠、象牙管玉、水晶片、琥珀片、方解石片と共に大碗内に立てかけるように海獣葡萄鏡が納められていた（図１）。時期的には７世紀後半である。崇福寺では、ガラス製の舎利容器が金銀銅の方形函に納められ舎利荘厳用の特殊な鏡が 11 面出土している。

写真 14　唐花六花鏡（東大寺大仏殿鎮壇具）

鎮壇具としての鏡

鎮壇とは、須弥壇や基礎の造営に際し、地鎮のために宝器を埋納する行為を指す。鎮壇の最古の例は、７世紀後半の奈良県川原寺塔跡で出土した無文銀銭や金銅円板であり鏡は伴わない。８世紀には、官大寺である興福寺中金銅と東大寺などで鏡を伴う鎮壇具の構成が確立する。明治７（1874）年、興福寺中金堂の基壇から発見された鎮壇具は、総点数 30 数種、1400 点に及ぶ。内容は、金銅や銀の鋺、盤、匙、鏡などの器物、金塊、砂金や延べ金など金属素材、それに水晶や琥珀、瑪瑙などの貴石類があり、明治 17（1884）年にも再び基壇中から銀鋺や玉類などが発見された。また、奈良県霊安寺や横井廃寺など畿内の定額寺や私寺からも鎮壇具として鏡の出土例が知られていおり、８世紀の末には奈良県坂田寺の事例が示すように、盛期の質量を減じた鎮壇具の構成をなすことが知られている。

墳墓への副葬

古く弥生時代から続く墓への鏡の副葬は、古墳時代前期には副葬品の主たるものとなった。降って飛鳥時代の終末期古墳である高松塚古墳の中型海獣葡萄鏡の副葬例や明治 32（1899）年に発見された奈良県大和郡山市松山古墳からも海獣葡萄鏡、鉄鏡が発見されている。

８世紀初頭の奈良県天理市杣ノ内火葬墓（石上宅嗣比定墓）からは、正方形の墓壙底板の上に、火葬骨の納入された木櫃を納置し、海獣葡萄鏡（面径 12.1 ㎝）が副葬されていた（写真 15）。

９世紀に入ると京都市西野山古墳の金銀平脱双鳳鏡、同市安祥寺遺跡の単龍鏡、同市長野古墓の双鸞狻猊六花鏡、京都府弥栄町鳥取古墳の瑞花双鳳八稜鏡、奈良市池上木棺墓（写真 16）の伯牙弾琴鏡など唐式鏡を副葬する木棺墓が多く発見され、10、11 世紀と各地に副葬の事例が認められ、特に

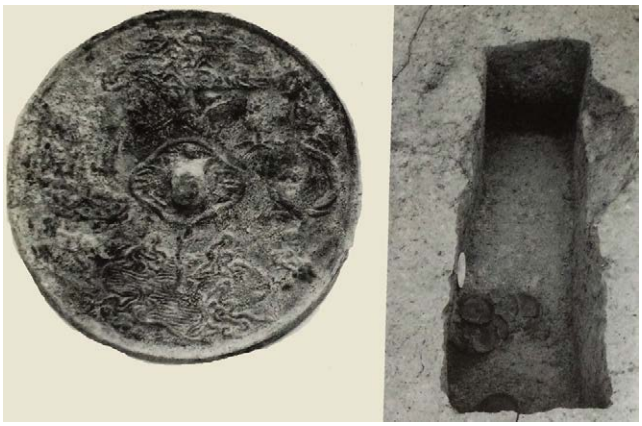


写真 15　杣ノ内火葬墓（奈良県天理市）

写真 16　池上木棺墓出土の伯牙弾琴鏡（奈良県広陵町）

杉山博　『古代の鏡』日本の美術 No.393 至文堂より転載

11 世紀には長野県、山梨県に事例が集中する。12 世紀後半から 13 世紀初頭にかけて全国的な広がりを見せ、関東では千葉県、茨城県を中心とした地域に顕著となるが、近年東京都など関東近隣地域でも事例を増やしている。

墓に副葬された和鏡　－ 千葉県下の事例 －

下総は 12 世紀後半の土壙墓が多い地域である。袖ケ浦市文脇遺跡（図 3）では 1 号、2 号土壙墓より菊花双雀鏡・櫻花双雀鏡が各 1 面ずつ検出され、佐原市吉原三王遺跡（図 2）では、一辺約 2 mの概ね正方形を呈する土壙墓より鋏・毛抜・刀子・青白磁合子・同安窯系青磁碗などの副葬品と共に 12 世紀後半の山吹双雀鏡が検出されている。和鏡は鋏・毛抜等と共に化粧箱に納入されていたものである。千葉市廿五里城や船橋市印内台遺跡群（図 4）、我孫子市羽黒前遺跡、薬師前遺跡、東金市久我台遺跡八千代市井戸向遺跡、市原市玉霊台遺跡、流山市西平井根郷遺跡などが代表的な遺跡として知られる。流山市思井堀ノ内遺跡（図 5）では、13 世紀後半から 14 世紀前半の方形周溝区画墓主体部より和鏡とともに龍泉窯青磁碗や横櫛・鉄釘などが出土し、歯牙の分析から被葬者は壮年から熟年の女性で、鎌倉時代後期の在地領主「地頭矢木式部大夫胤家」妻が想定される。全国的に見ても墓の規模や副葬品は突出したもので、巌松樹鴛鴦鏡も該期の和鏡では類例は極めて少ない。特別に誂えられたものと理解され、報告書の指摘の通り身分が高く財力もある在地領主の妻への副葬品である蓋然性は高い。

No.	遺跡名	時期	名称	縁式	鈕式	圏式	面径(cm)	縁高(cm)	金質	住所(遺跡)	検出遺構
1	有吉北貝塚	13c初	甜瓜双鳥鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圏細線	9.7	0.5	-	千葉市緑区有吉町	土壙墓
2	文脇遺跡	12c後-13c初	菊花双雀鏡	外傾式厚縁	花蕊中隆鈕	単圏中線	9.8	0.4	-	袖ケ浦市野里・上泉地内	1号土壙墓
3	文脇遺跡	12c後-13c初	櫻花双雀鏡	直角式厚縁	花蕊中隆鈕	単圏細線	9.8	0.4	-	袖ケ浦市野里・上泉地内	2号土壙墓
4	山崎横穴群	14c	菊花双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	特殊圏	11.4	0.6	-	茂原市山崎	やぐら
5	吉原三王遺跡	12c後	山吹双鳥鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圏細線	10.9	0.7	-	佐原市丁子字天ノ宮	501号土壙
6	吉原三王遺跡	11c	八稜鏡	蒲鉾式	素鈕	二重圏	7.9	0.2	-	佐原市丁子字天ノ宮	066号住居跡
7	思井堀ノ内遺跡	14c前	巌松樹鴛鴦鏡	直角式中縁	亀鈕	単圏中線	11.7	1.1			
8	千葉市廿五里第2次調査	-	-	直角式厚縁	-	-	-	-	-	千葉市若葉区源町	
9	西屋敷遺跡	14c	松樹双雀鏡	直角式中縁	亀鈕	特殊圏	10.3	-	-	千葉市若葉区大宮町	401号地下式坑
10	印内台遺跡群(第27次)	12c	瑞花双鳳五花鏡	直角式厚縁	花蕊中隆鈕	単圏中線	11.8	1.1	-	船橋市印内台	054土壙墓
11	印内台遺跡群(第21次)	12c後	水草双雀鏡	外傾式中縁	捩菊座鈕	単圏細線	9.8	0.6	-	船橋市二和東5-32-17	3号土坑
12	印内台遺跡群(第13次)	14c	俵藤太鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圏中線	8.8	-	-	船橋市二和東5-32-17	井戸脇より出土
13	羽黒前遺跡	12c後	山吹蝶鳥鏡	外傾式細縁	捩菊座鈕	単圏細線	10.7	0.7	-	我孫子市新木地区	土坑（227号土坑）
14	羽黒前遺跡	12c後	秋草双鳥鏡	外傾式細縁	捩菊座鈕	単圏細線	11.2	0.6	-	我孫子市新木地区	土坑（740号土坑）
15	薬師前遺跡	12c後-13c初	水鳥群遊鏡	外傾式厚縁	花蕊中隆鈕	単圏細線	10.0	0.5	-	我孫子市新木地区	土坑（32号土坑）
16	久我台遺跡	13c	垂柳双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圏細線	11.3	0.8	-	東金市松之郷	SK263号土壙
17	井戸向遺跡	12c後	山吹双鳥鏡	外傾式厚縁	花蕊中隆鈕	単圏細線	7.9	0.4	-	八千代市萱田	P041
18	五霊台遺跡	12c後	山吹散双鳥鏡	外傾式厚縁	花蕊中隆鈕	単圏中線	-	-	-	市原市五霊台	039号土坑
19	西平井根郷遺跡	12c後-13c初	菊花双雀鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圏中線	11.0	-	-	東葛西郡	土壙
20	葛飾八幡宮経塚	12c後	松喰鶴鏡	外傾式細縁	捩菊座鈕	単圏細線	10.1	0.7		市原市八幡	
21	篠本城跡	鎌倉時代	菊花双雀鏡	-	-	-	9.01	0.65	-	光町篠本	
22	篠本城跡	鎌倉時代	秋草双鳥鏡	-	-	-	11.22	1.15	-	光町篠本	
23	大台遺跡	鎌倉時代	双鳥波涛鏡	-	-	-	10.6	0.7	-	香取郡下総町名木	土壙墓
24	上ノ台遺跡	平安時代	山吹双鳥鏡	-	-	-	10.8	0.65	-	佐原市玉造	墓
25	荒久遺跡	12c	菊花双鳥鏡	-	-	-			-	市原市	土壙墓
26	南向原遺跡	11c	八稜鏡	-	-	-			-	市原市	
27	上総国分尼寺跡	平安時代	瑞花双鳳八稜鏡	-	-	-			-	市原市惣社	土壙墓
28	文六第二遺跡	-	猿猟双鸞八花鏡	-	-	-			-	千葉市土気町	住居址周溝付近床面上
29	西屋敷遺跡	-	松樹双雀鏡	-	点文亀座鈕	-			-	大宮町	第２区画内地下式土坑
30	国府台遺跡	平安時代	瑞花八稜鏡	-	素鈕	単圏中線	6.8	0.2	-	市川市真間４	SK-19上面
31	印内台遺跡	鎌倉時代	八稜鏡	-	-	-	10		-	船橋市印内１丁目	土壙墓
32	谷津経塚	平安時代	瑞花双鳳八花鏡	-	-	-	16		-	香取郡下総町	
33	末広遺跡	室町時代	-	-	-	-	11.6	0.3	-	千葉市	IP-90
34	草刈遺跡（F区）	13c	-	外傾式厚縁	-	-			-	市原市草刈	土壙墓
35	健田遺跡	-	-	-	-	-			-	千倉町	
36	千葉寺経塚	-	-	-	-	-			-	千葉市中央区葛城1-5-2	
37	応神塚古墳	-	-	-	-	-			-	千葉市中央区寒川町	漢鏡1面、直刀破片
38	応神塚古墳	-	-	-	-	-			-	千葉市中央区寒川町	漢鏡1面、直刀破片
39	雲ノ境遺跡	平安時代	-	-	-	-	10.24	0.63	-	千葉市菊間	
40	思井堀ノ内遺跡	13c	-	-	-	-	11.5		-	流山市	
41	名木不光寺遺跡	11ｃ-12ｃ	瑞花鴛鴦八稜鏡	-	花蕊中隆鈕	特殊圏				成田市	

表 3　千葉県下出土の和鏡

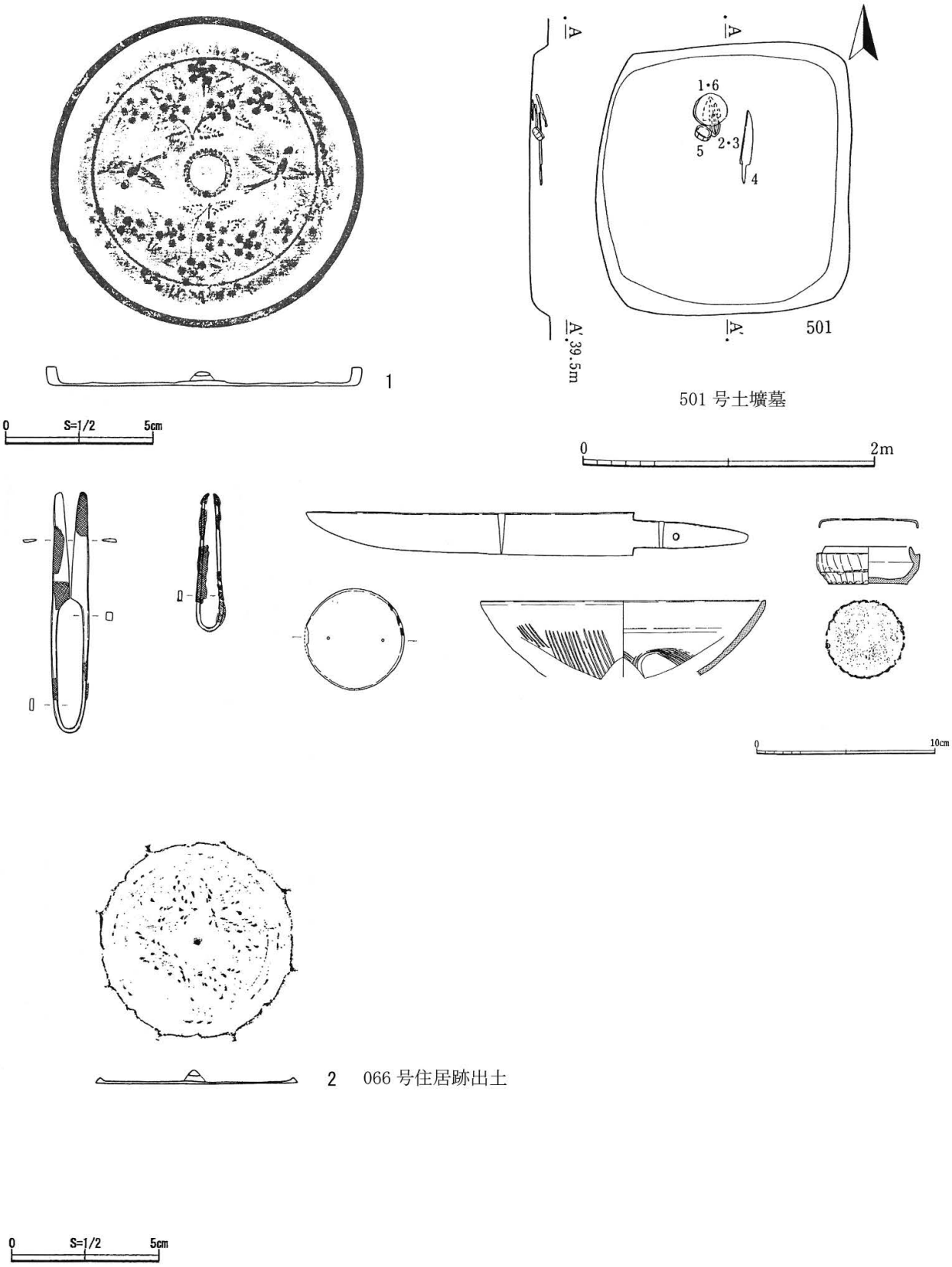


図 2　吉原三王遺跡（香取市佐原丁子字天ノ宮）12c 後半　八稜鏡 /11c

栗田則久・千葉県文化財センター 1990『吉原三王遺跡 - 東関東自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅴ（佐原地区 2)-』、笹生衛 1995「東国における中世墓地の諸相 - 房総の事例を中心に -」『(財) 千葉県文化財センター研究紀要 16』、中世墓資料集成研究会 2005『中世墓資料集成 - 関東編 (1)-』

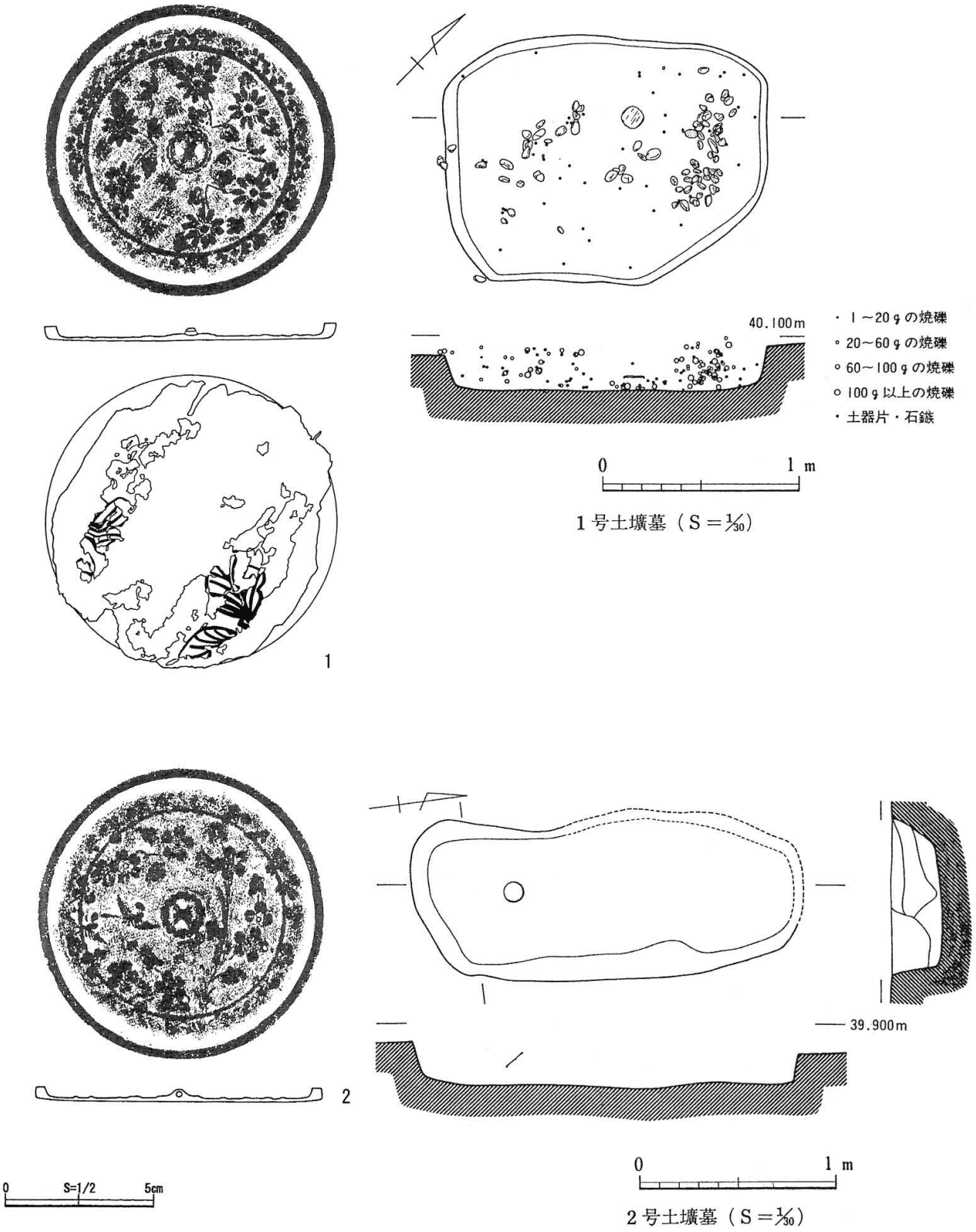


図3　文脇遺跡（袖ケ浦市野里・上泉地内）12c 後半

山本哲也・君津郡市文化財センター 1992 君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 69 集『文脇遺跡』

青木豊・山本哲也 1991「千葉県袖ケ浦市文脇遺跡出土の和鏡について」『國學院大學考古学資料館紀要』第 7 輯、中世墓資料集成研究会 2005『中世墓資料集成－関東編 (1)-』

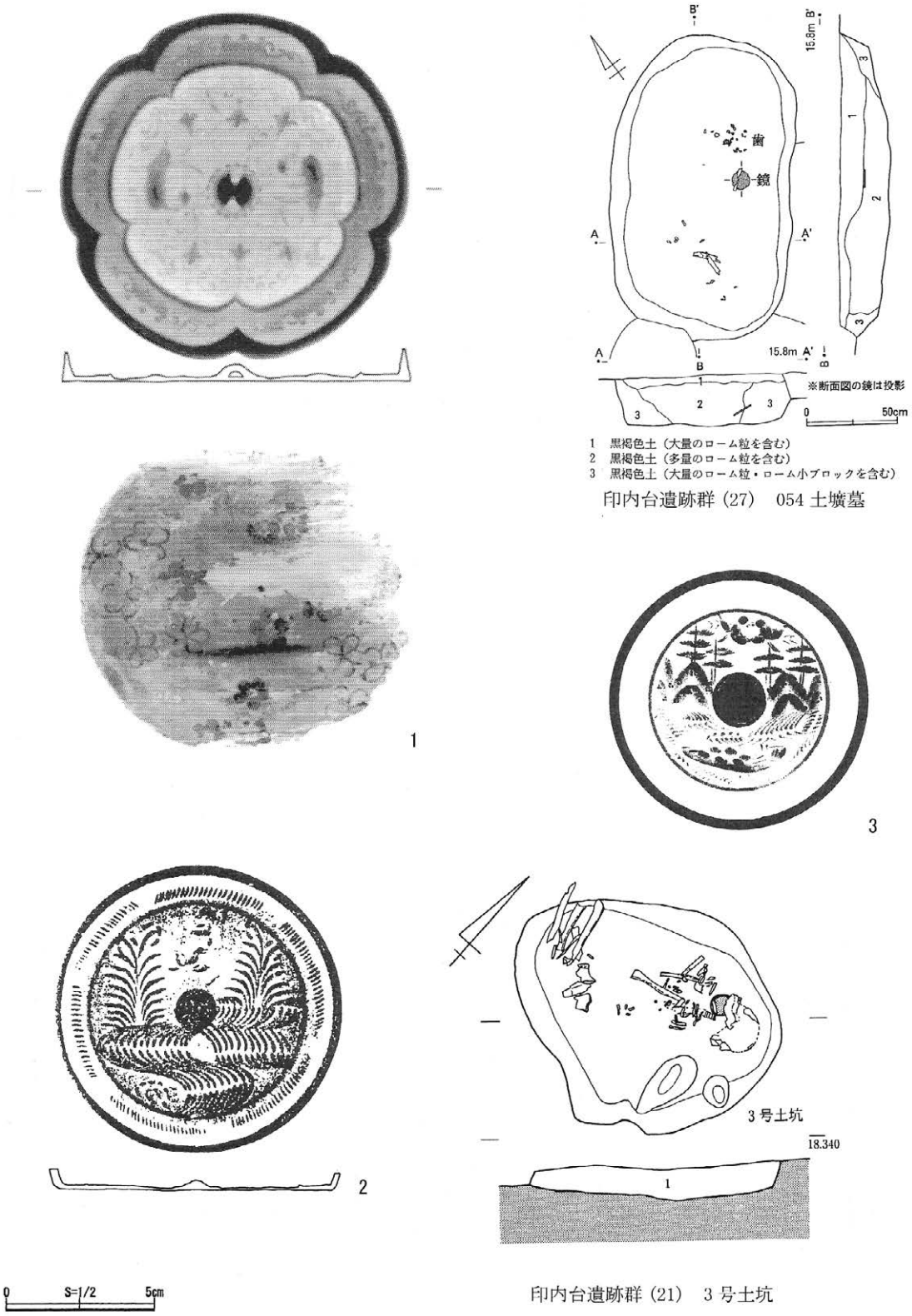


図 4　1 瑞花双鳳五花鏡（第 27 次）12c　2 水草双雀鏡（第 21 次）12c　3 俵藤太鏡（第 13 次）15c

印内台遺跡群（船橋市印内台 / 船橋市二和東 5-32-17）

白井太郎・船橋市文化・スポーツ公舎埋蔵文化財センター 1998『印内台遺跡群 (21)』、中世墓資料集成研究会 2005『中世墓資料集成 - 関東編 (1)-』

白井太郎・船橋市文化・スポーツ公舎埋蔵文化財センター 2002『印内台遺跡群 (27)』、中世墓資料集成研究会 2005『中世墓資料集成 - 関東編 (1)-』

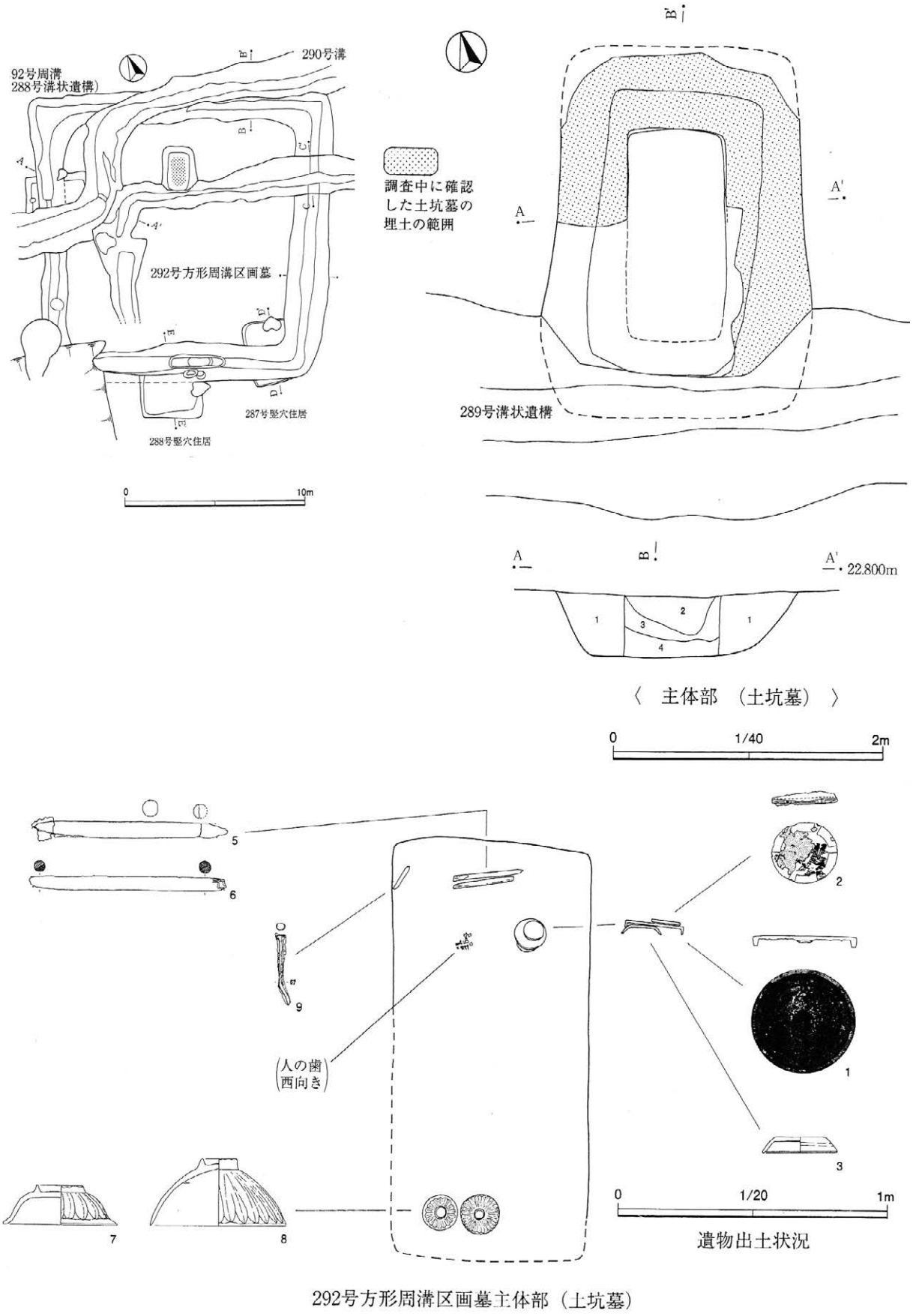


図 5-1 思井堀ノ内遺跡 (流山市思井)

千葉県教育振興財団 2006『流山市思井堀ノ内遺跡： 中世編』

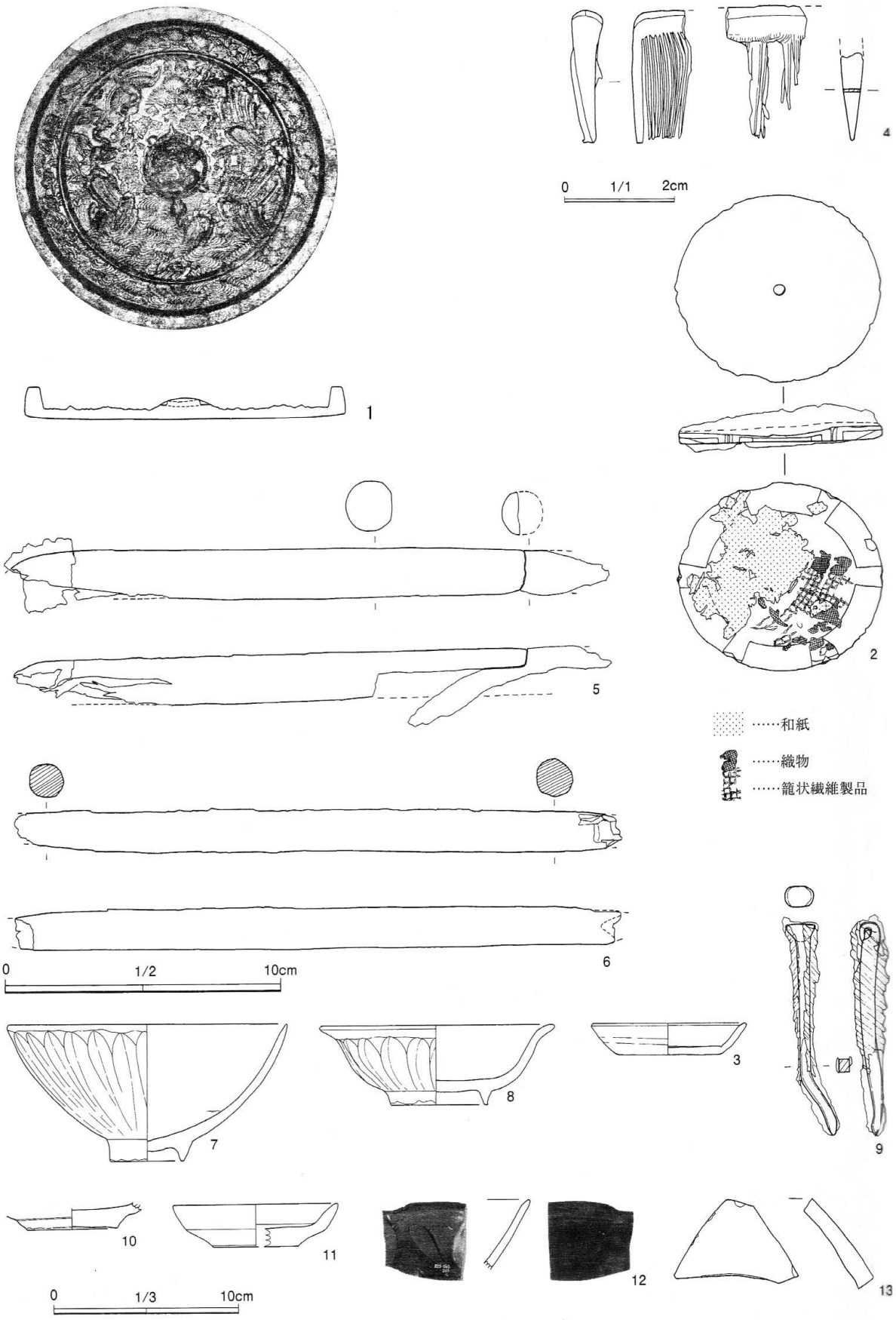


図 5-2 思井堀ノ内遺跡（流山市思井）巌松樹鴛鴦鏡 14c 前

写真 17　瑞花鴛鴦八稜鏡（名木不光寺遺跡）　　**出土状況**

名木不光寺遺跡は、北方にある利根川に開かれた大きな谷から伸びる小支谷に、東西を挟まれたやや幅広い舌状の標高約 39 mの下総台地上に位置する。この地域は、中世には神崎荘西端域にあたり、千葉一族神崎氏の系譜に連なる南城氏が存在した。この周辺の有力な武家である大須賀氏と神崎氏の家系から派生した名字の分布等から、この地域が大須賀氏と神崎氏の勢力圏の境目付近であったことが想定される。名木不光寺遺跡の西部にある南城山常福寺は、延応元年（1239）に開基され、寛永 2 年（1625）に中興されたと言われる。なお、常福寺の南西 500 m先の台地縁辺部には、名木城跡がある。

これまで３度にわたる発掘調査が行われており、これらの調査によって、名木不光寺遺跡の変遷がある程度解明された。５世紀末頃から竪穴建物が作られるようになり、６世紀にはその数が次第に増えていった。そして７世紀になると数多くの古墳が形成される墓域となった。その後、一時的な断続を経て、平安時代には竪穴建物跡と掘立柱建物からなる小規模な集落をなし、中世になると墓域を伴う生活空間になっていったことが指摘されている。今回発見された中世屋敷跡は、名木不光寺遺跡第３地点に所在し、１辺約 60 mのほぼ方形を呈し、周囲を土塁と溝によって囲まれている。ただ、南西部の一部区画は突出しており、南東部は地形によって不整形になっている。その中央部は方形を意識した削平によって、周辺より一段低い空間が造り出されている。この台地整形部分を中心として、掘立柱建物跡や地下式坑・竪穴状遺構・粘土貼土坑といった遺構が分布しており、その外縁部分では、遺構の密度がやや薄くなる。特に外縁南西部は、一段低く削平されており、ほとんど遺構がない。また、屋敷内には塚が５基所在しており、その盛土に原始古代から近世に至る遺物が混在している。出土遺物は、貿易陶磁である青磁・青白磁、瀬戸美濃系天目茶碗・平椀・端反皿・卸皿・瓶子、志野系皿、内耳鍋、かわらけ、古銭、銅製品、石製品（宝篋印塔・硯・砥石等）がある。遺物の年代幅は、13 世紀～ 17 世紀初頭および近世後半の遺物であり、その主体は 14 世紀後半～ 15 世紀前半と考えられる。

出土した遺物のうち、注目されるのが、２号溝北辺の中層よりやや低い部分から出土した豊作吉兆を示す花と夫婦和合の象徴であるオシドリが描かれた瑞花鴛鴦八稜鏡である。大きさは 10.5 ｃｍ、重さ 136.1 ｇを呈し、鏡式からすれば 12 世紀代初頭に遡り得るものであるが、より後出の可能性が指摘できる。鏡面には、鏡を磨いた銀メッキが残る。元となる鏡から鋳型を作って製作された踏返し鏡である。

（日暮冬樹　「名木不光寺遺跡－古鏡が出土した中世屋敷跡－」発表資料より）

山岳信仰と鏡

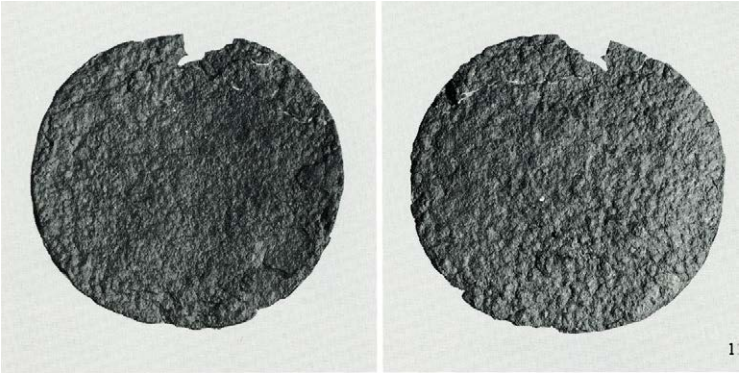
奈良時代に創始された山岳密教を一つの契機として全国に点在する霊山は山林仏徒によって開山された。栃木県日光男体山や石川県白山、奈良県弥山など霊山山頂の多くに信仰の痕跡を残す山頂遺跡が形成されている。日光男体山山頂遺跡(註10)は、舌状に突出した火口壁西部の断崖状に占地する岩陰から古墳時代から近世まで絶え間なく継続する6,200点に及ぶ遺物が発見されており、奈良時代の鏡は、9面（写真18）を数え、10～11世紀の八稜鏡が多数を占める。

写真18　日光男体山と古代の鏡

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・日光二荒山神社2014『日光二荒山神社中宮祠宝物館所蔵男体山頂遺跡出土鏡の研究』

海洋信仰と鏡

伊豆諸島式根島、霊峰富士を遠望する見通しの良い崖上に占地する吹之江遺跡(註11)からは8世紀前半から中頃に帰属する須恵器類や鉄鉾、短刀などと共に5面の鏡形鉄製品（写真19）が発見された。近在する野伏西遺跡からは、同時期の海獣葡萄鏡も発見されており、この地が海の難所である走水海を往来する船舶の海路の安全を祈願した祭祀遺跡であったことが推定される。海の祭祀ともいえるこのような事例は、岡山県笠岡市大飛島遺跡なども知られている。



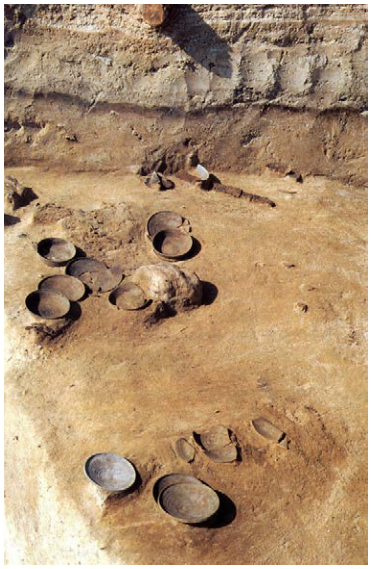


写真19　吹之江遺跡（東京都新島村）　鉄鏡　8世紀

走水海を臨む式根島の高台に立地する。須恵器や鉄剣などと2面の鉄鏡が発見されている。

池への投入－羽黒鏡の世界－（写真 20）

池沼中から鏡が発見される例は、全国に 30 箇所以上を数え（註 12）、12 世紀後半から 13 世紀初頭にかけての事例が多く認められる。群馬県赤城山小沼では 11 世紀の八稜鏡の他に 12 世紀後半の和鏡 13 面が発見されている。

羽黒山御手洗池検出の和鏡群は、「羽黒鏡」と称され、永年に亙る池中の遺存が鏡に黒変をもたらし麗しい漆黒と変化したもので平安時代の金属工芸を代表するものの一つである。大正 3(1914) 年頃、神池に架橋（御幸橋）の際、100 面余りの鏡が出土し、さらに大正の末頃、内務省技師が神池への架橋に苦言を呈し、橋を取り払った際にも 30 ～ 50 面の鏡が発見されたという。昭和 3(1928) 年、昭和 6(1931) 年にも鏡は発見されたものの、その多くは鶴岡の古美術商を通じて散逸の憂き目にあい、200 面もの鏡を入手した京都の黒川幸七 (1843-1900) や東京帝室博物館など個人や博物館の手に渡ったものも多い。昭和 6(1931) 年に入手した鏡を売買していた輩が裁判に付され、一部が押収され神社に返還されたことによって神社所蔵の鏡と合わせて 190 面が出羽三山神社に残り昭和 12(1937) 年國寶に指定され、戦後、一括重要文化財に指定されている。また、羽黒山山頂諸地点からも多数の和鏡が偶発的に発見されている。

写真 20　三神合祭殿と鏡ヶ池

池に投げ込まれた鏡の多くは 12 ～ 13 世紀であり信仰のピークがその頃にあったことが理解でき、都で製作されたものと思われる精緻な作行きのものが多いことから、平安貴族の関与が指摘されている。12 世紀前半から量産されはじめる和鏡の優品は、都を中心に製作されたことが確認されており、羽黒山等の信仰対象地に祭具として多くの鏡を運び入れたのは修験者であったことが推定されている（註 13）。熊野信仰では、中世以降聖護院を総本山とする天台系修験と醍醐寺を総本山とする真言系修験があり、それぞれ順峯、逆峯の経路をたどって熊野に到達した。熊野御師などの修験者が都で製作された鏡の拡散に一役買ったことが推定される。彼らは関東や東北にも熊野信仰を布教させ、東国各地に御正体や鏡を御神体や神への幣として伝えたのである。宮城県名取市熊野那智神社に遺された多数の御正体や鏡（写真 21）は熊野信仰の東北布教の証左として注目される一群であろう。ただし本家熊野那智大社の本地仏が千手観音であるのに対し名取熊野那智神社の御正体のほとんどが、聖観音であることは、出羽三山修験の本地仏が聖観音であることと大いに関係するものであ

図 6 菊花散双雀鏡（建武五 (1338) 年）

松戸市博物館　2001『中世の東葛飾』 p 20 より

ろう。我孫子市羽黒前遺跡の中世墓では、大観通寶（初鋳 1107 年）を伴う山吹蝶鳥鏡や 13 世紀前半の羽黒山信仰の同地域への伝播を直截に証明する菊花散双雀鏡（図 6）が遺存する。同鏡の鏡面には針書で「敬白 / 奉懸羽黒権現 / 御正躰一枚 / 右平等願成就 / 円満為也 / 建武五年□月」の文字が刻まれる（註 14）。

写真 21　熊野那智神社（名取市）宮城県と松喰鶴鏡（13 世紀）

松喰鶴鏡の写真は神奈川県立歴史博物館　2005『聖地への憧れ　中世東国の熊野信仰』より

経塚への埋納

永承 7（1052）年に末法の世が訪れる事を恐れた貴族達は、釈迦入滅後 56 億 7,000 万年後の弥勒下生に備え教典を伝えようと、競って山中深く経塚を造営した。寛弘 4（1007）年、藤原道長（966-1028）が大和金峰山山頂に法華経を献じて造営した金峯山経塚を最古として、その後 12 世紀を中心に全国各地に造営された。貴族は、末法思想に触発され浄土教の教義にもとづいて、仏の教えが廃れ滅してゆく現世を憂き世と考え、来世に極楽浄土に生まれ変わることを願ったのである。そのためには功徳を積む意味での「作善業」を行ったのである。法華経を書写し、地下に経巻を埋納して後世に伝えるため経塚を造ることは作善行の極みとされたのである。経塚の構造は、土中に石室を設え石や陶器の外容器の中に青銅製の教典を納めた経筒を安置し、和鏡や銭貨、刀子、玉、仏像等を副葬し、中でも和鏡は教典を護る僻邪の具として多数の副納例が知られている。鏡は、副納品として用いられる以外に経巻を納める経筒の蓋や底板に転用されたり、鏡を改変して経筒の筒身部を造作する例なども知られている。

平成 17(2005) 年～平成 19(2007) 年にかけて富士山静岡空港建設に伴う調査で、平安時代から室町時代へ続く山林寺院跡である堂ヶ谷廃寺建物の裏側（北東）からは、12 世紀後半に比定される未盗掘の経塚遺構である堂ヶ谷経塚が発見された（写真 22・23　図 7）。1 号経塚は、銅製経筒、土師器製外容器、和鏡 16 点、短刀（腰刀）63 点、折り曲げられた黒漆太刀など、貴重な遺物が多量に出土している（註 15）。国内最多の短刀の出土もさることながら 16 面もの和鏡の一括出土も極めて希少な事例であろう。

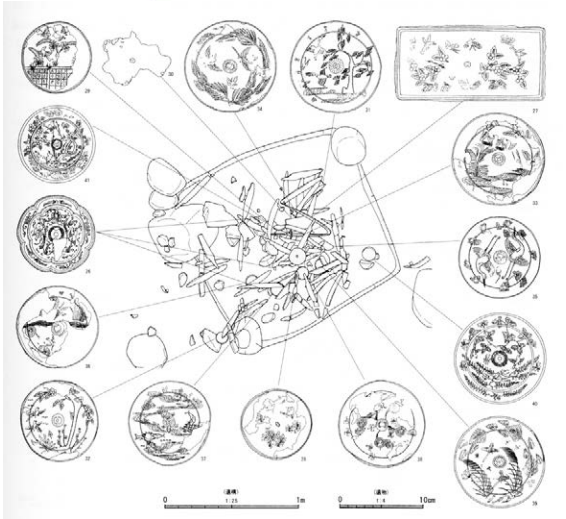


写真 22・23　図 7　堂ヶ谷経塚 1 号経塚（静岡県牧之原市）

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010『堂ヶ谷廃寺　堂ヶ谷経塚』より転載

御正体 －鏡像と懸仏－

平安時代後期以降、神々は仏や菩薩（本地）が、衆生を救済するために仮の姿と（垂迹）として顕れたものであるとする「本地垂迹説」が天台宗の教義に基づいて定着し、有力な神社を中心としてそれぞれの祭神ごとに本地仏が確定してゆく。御正体とは、本地垂迹説に基づいて祭神の本地仏を表した像のことであり、鏡の表面に神仏を線刻した鏡像と円形の銅板に神仏を半肉彫した懸仏を指す。鏡像製作は10世紀末頃に遡り、中国でもほぼ同時代に浙江省を中心に鏡像が認められることから天台山との関係が推定されている。京都府醍醐寺に伝世する如意輪観音等鏡像（写真24）は、花綬鸚鵡八花鏡の鏡背に如意輪観音および四天王を毛彫りで表したものである。如意輪観音は、醍醐寺開祖聖宝が、准胝観音とともに最初に醍醐寺に祀った仏であり、その後の鎮守である青瀧権現の本地仏である。花綬鸚鵡八花鏡は、唐からの将来品である可能性も指摘されるが踏返し鏡であることからわが国における鏡像の古作と理解すべきであろう。本例の他に長徳3(997)年の銘が刻まれた鳥取県三仏寺に伝わる花綬鸚鵡鏡の鏡面に毛彫りされた胎蔵界中台八葉院鏡像が知られる。11世紀初頭には、山林修行が体系化された修験道独自の神格である蔵王権現を礼拝する鏡像が表された。御正体という本地垂迹説を象徴する礼拝仏は、その後時代の推移と共に各地の神社に安置され信仰の対象となったのである。12世紀の後半頃になると岩手県中尊寺に伝わる釈迦如来御正体（写真25）のように鏡面に毛彫りされていた鏡像が銅板を半肉状に打ち出して作られた仏像を銅製の円盤に鋲留めしたものが見られるようになる。さらに13世紀頃には岐阜県新宮神社の虚空蔵菩薩懸仏（写真26）のように直径60㎝を越える鏡板に吊り金具を取り付け蓮華座や唐草文の舟形後背や瓔珞で荘厳し加彩したものとなっていった。

写真24　如意輪観音等鏡像（京都府　醍醐寺　9－10c）

奈良国立博物館　2007『神仏習合かみとほ

写真25 釈迦如来懸仏（岩手県中尊寺　12c）左

写真26 虚空蔵菩薩懸仏（岐阜県新宮神社　1257年）

奈良国立博物館　2007『神仏習合かみとほとけがおりなす信仰と美』より転載

中世の鏡

唐式鏡から和様化していく過程で、隋・唐鏡に見られるバラエティ豊かな鏡背文様の多くは淘汰され、唐花双鳥文系鏡のみが採用されることとなり、９世紀前半に瑞花双鳥八稜鏡が誕生、概ね 12 世紀までの主たる鏡式となる。基本的な平面形態は八稜形をなし、主文様の双鳥には宝相華、仏相華との組合わせで鳳凰・鴛鴦・鸞鳥の別がある。京都府鳥取遺跡出土の瑞花双鳳八稜鏡（図 8）の如く唐式鏡そのものの踏返しではなく、箆押しによる型作りからの作鏡が主体となったことによって唐式鏡とは異る和趣の雰囲気が表出されるようになった。この段階では、文様表現、構成にオリジナリティこそ認められないが、多くの唐式鏡から唐花双鳥文系鏡を抽出し嗜好性を示したことと鋳型製作技術の完成が和鏡誕生の前段階として捉えられる（註 16）。

図 8　瑞花双鳥八稜鏡（京都府鳥取遺跡）９c

和鏡の変遷

11・12 世紀

９世紀前半に確立された和様化された瑞花双鳥文は、概ね 11 世紀まで引継がれるが、11 世紀後半には和鏡としての独自性を発現する要素を備えた資料が知られる。承保４（1077）年の奥書結名書を有する三重県四天王寺本尊薬師如来蔵の体内納入の唐草双鳳鏡（図 9）は、和様化された柔らかい表現で唐草双鳳が描かれ、円形をなす外形と花形鈕座を置き細く直立させた縁、細く繊細な界圏を有するもので、12 世紀に主流をなしていく鏡式の祖型的要素を有する。

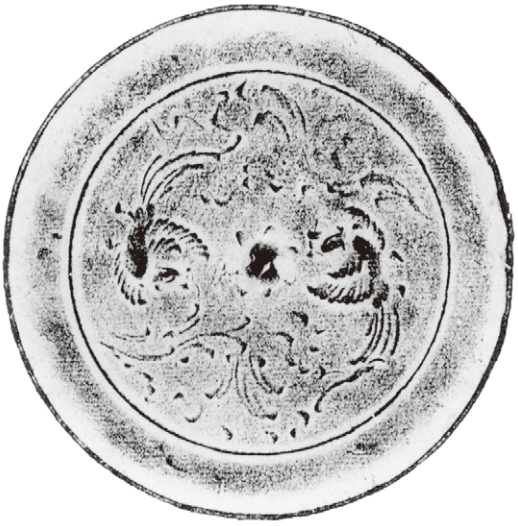


図 9 唐草双鳳鏡（三重県四天王寺）11 c

一方、和鏡の鏡式確立にさらなる影響を与えたとされるのが 10 世紀中頃から 11 世紀初頭にかけて舶載された宋鏡の一群である。唐代末期から北宋の頃の鏡式の特徴は、素鈕・無圏・縁幅は厚く、断面は台形あるいは蒲鉾形を呈し、一様に鋳造技術の劣った素文鏡である。中でも浙江省周辺で製作された「湖州真石家青銅照子」の文字を陽鋳した湖州鏡は、各地の経塚などから多数検出されている。また、鹿児島県山宮神社蔵鏡（註 17）など湖州鏡と鏡式を同じくするが明らかに銘を削り取って踏返したものや、鹿児島県新田神社蔵鏡の一群など湖州鏡の形を踏襲するが金質が多少異るなど仿製の可能性もあり、単に鏡式の比較だけでは不明な点も多く様相は一様でない。　何れにしても明らかに宋鏡の影響下に製作された

図 10　蝶鳥鏡（東京国立博物館）保安 3(1122) 年

と思われる一群が三重県多度神社経塚出土鏡に代表される一群である（図10）。同鏡式の和鏡は、島根県倭文経塚出土の康和3（1103）年銘経筒と共伴した蝶鳥六花経や三重県朝熊山経塚出土品などにも知られ、概ね12世紀前半に集中する。小さな素鈕、無圏という鏡式は鏡背空間に制約を外し、箆書きによる絵画的な文様展開を可能にした。唐式鏡の如くシンメトリーを基本とし、判で押したような静的鏡背文様からさらに巧緻な箆押し技術の発達によって花鳥に躍動感が与えられ、生き生きとした動的世界が展開されるようになった。まさにわが国独自の鏡としての主体性を確立した時代となった。12世紀の和鏡は日本的雅趣に富んだ作例が多く、数寄者の間では一般に「藤原鏡」と称されている。11世紀後半に認められる和鏡としての鏡胎の確立と多度式鏡に端を発した絵画文様構成の発案は、12世紀中頃以降の和鏡の鏡式として普遍的なものとなってゆく。該期の和鏡の特徴をあげれば、直径が８cm～11cm程の小型円鏡が主体で、鏡胎は薄く、界圏は細線・中線・太線単圏を呈し、縁は極く希に低縁が認められるが、細縁・中縁・厚縁の３種が主体を占める。何れも界圏は細いものが、縁は厚縁よりも細縁がそれぞれの中でも段階的により古様を示す傾向が看取される。鈕には、素鈕・亀鈕など比較的多くのバラエティーが認められるが概して菊花座鈕が前半から中頃までを、後半は花蕊座鈕がその主体を占め、鏡背文の構図は平面構成から立面構成へと変化する。

図11　松鶴鏡（東京国立博物館）
保安3(1122）年

図12　菊薄双雀鏡（鰐淵寺）
仁平2（1152）年

図13　山吹散双雀鏡（金仙寺）
嘉應２(1170）年

図14　菊花双雀鏡（東京国立博物館）
建久7(1196）年

12世紀前半の和鏡は概して薄く繊細で、細い縁は垂直（図11）ないしはやや外反気味（図12）に立ち上がる。鈕は菊花座鈕が多く認められる。中頃には中縁（図15）が多く認められ、12世紀中頃から後半にはやや外反する太縁（図13）や垂直に立ち上がる太縁（図14）なども登場する。花蘂座鈕は中頃以降に多い。

図15　瑞花双鳳鏡（東京国立博物館）
保元元（1156）年

また、立面構成における草樹の配置にはパターン化が認められ、文様構成では、主題の多くをを鳥文と草花で占め、鳥は鶴・雀・雁・雉などが主となり、瑞花は山吹・菊・蘆・松・柳・秋草など野山の植物から採用される。片輪車・網代・格子といった器物文や兎などの動物文なども少数ながら散見される。（図11～15）

13.14 世紀

12 世紀前半に和鏡としての主体性を確立し、12 世紀中頃から後半にかけて様々な鏡胎・文様・構図の成立展開という発展期を経て、13 世紀前半には総じて重厚感を増すかたちで円熟期を迎えた和鏡の新たな発展がはじまる。該期の鏡式の特徴は、直径が 10 ㎝～ 11 ㎝程度の円鏡が主体となり鏡胎の薄いものはほぼ消滅、界圏は中線・太線単圏をが主流となる（図 16・17)。縁は細縁が無くなり直角式の厚縁が主体を占めるが、中縁も比較的多く存在する。鈕は花蕊座鈕がその主体を占め、花座鈕・亀鈕などが認められる。文様構成は、13 世紀前半から中頃にかけては 12 世紀に確立された意匠を踏襲するものが多く、繊細典雅な表現は失われ加飾性を表に打ちだした力強い作例が主体をなす。構図は立面構成が主流をなし、洲浜を画面下に描き、草花や樹が右下から反時計回りに展開する基本的な構図が定着し、13 世紀後半から 14 世紀前半頃には葦手や菊・桜・梅・蝶・浮線稜などの散らし文、七宝繋などを地文としたもの、画面を四分割するものなど、さらに幾つかのバリエーションを加える。さらにこの頃、洲浜から屹立する蓬莱山と遊鶴を描写する蓬莱鏡が定型的なモティーフとして確立し、その後長らく和鏡の主文様として定着する。正中２年（1325）の墨書銘を有する千葉県大戸神社の蓬莱鏡（18 図）や、永仁２年（1294）の刻銘を有する鹿児島県新田神社洲浜牡丹双鳥鏡など大型鏡の作例が多くなるのもこの頃からである。明徳元（1390）年の紀年銘を有する和歌山県熊野速玉大社の 18 面におよぶ御神宝鏡は、14 世紀末期の鏡式の特徴を明確にする。すなわち、鏡胎は厚く重厚で、縁は直角式厚縁を呈し文様表現は肉取りが高く鋭利な表現がなされるものである。

図 16　菊花双雀鏡（鰐淵寺）建長 7(1255) 年

図 17　菊花双雀鏡（諏訪神社）弘安元年 (1278) 年

図 18　蓬莱鏡（大戸神社）正中 2(1325) 年

図 19　牡丹鳳凰鏡（個人蔵）正和 4(1315) 年

また、13 世紀中頃に新出する鏡式として擬漢式鏡（図 19)がある。幅を広くとった外区に鋸歯文・竪線文を施す漢式鏡に似るためその名称が付けられ、いくつかの鏡式が知られる。大きく分類すると外区と界圏内側に鋸歯文・竪線文を施すもの、花形界圏に珠文帯を有するもの、界圏外側に蕊状文帯を施し走獣葡萄鏡に似た鏡式をとるものなどがあり、14 世紀前半に登

場し 15 世紀末頃まで継続する。さらに 14 世紀中頃から後半にかけて住吉・俵藤太などの古典文学意匠が採用され 15 世紀前半頃まで認められる。八稜鏡などの復古的な鏡式が復活するのも該期の特徴でもある。

15･6 世紀

室町時代の和鏡も基本的には鎌倉時代の鏡式を踏襲するかたちで推移する。文安 2（1445）年の紀年銘を有する愛知県熱田神宮伝来の蓬莱八稜鏡（図 20）もまた同種の表現がなされる遺存例であろう。これらの鏡は奉納という特別な条件を前提に製作されたものではあるが、一般の鏡にも同種の雰囲気が多分に認められることから該期の作風が看取できよう。また、同社の文安 2（1445）年の紀年銘を有する梅花散双鶴鏡（図 21）に代表されるように、この頃を境に二重界圏が採用され 16 世紀には普遍的なものとなる。該期の特徴的な鏡背文様としては、長生殿や竜宮、家紋散しといったものや、唐物工芸の影響を受けた図案が特徴的に認められる。亀鈕と双鶴が接嘴する亀鈕双鶴接嘴文などが採用される（図 22）。これはいわば形骸化した蓬莱文であり、明徳元（1390）年の熊野速玉大社御神宝鏡の類例を嚆矢として、以降 15・6 世紀に至っても広く採用される。鏡胎は概して厚く、垂直に立ち上がる厚縁、二重界圏、蓬莱文が主たる文様構成となる（図 22）。16 世紀の後半には「天正十六天下一青家次」桐竹鏡（東京国立博物館）など鏡師の銘が陽鋳された精緻な白銅鏡が知られる。青家は江戸時代には禁裏御用鏡司として明治時代まで継続する。

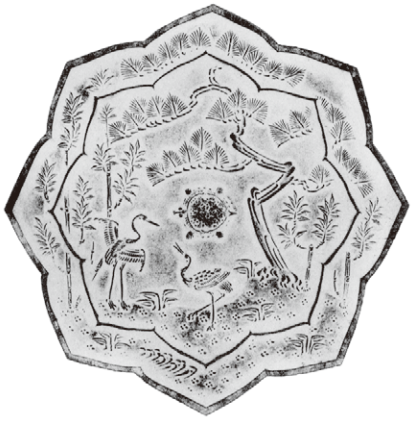


図 20　蓬莱八稜鏡（熱田神宮）

図 21　梅花散双鶴鏡（熱田神宮）

16 世紀には柄鏡の出現というエポックな出来事があった。足利義政に同朋衆として仕えた相阿弥が記した永正 8（1511）年の『君台観左右帳記』書院飾次第には書院の柱に懸ける飾鏡の記述が認められ、『御飾記』には大永 3（1523）年の東山殿書院飾図には柱飾鏡の図が所載される。何れも書院を飾る懸け鏡としての記述であり、該期の柄鏡の一用途を具に物語っている。柄鏡の出現年代と受容過程については諸説 (註 18) あるが、大永 5（1525）年の紀年銘を有する愛知県熱田神宮伝来の花菱双鶴柄鏡（図 23）が出現期に近い段階のものと捉えられる。

図 22　鳳来峡鏡（熱田神宮）
文明 16 年（1485）

図 23　花菱文散柄鏡（熱田神宮）
大永 5 年（1525）

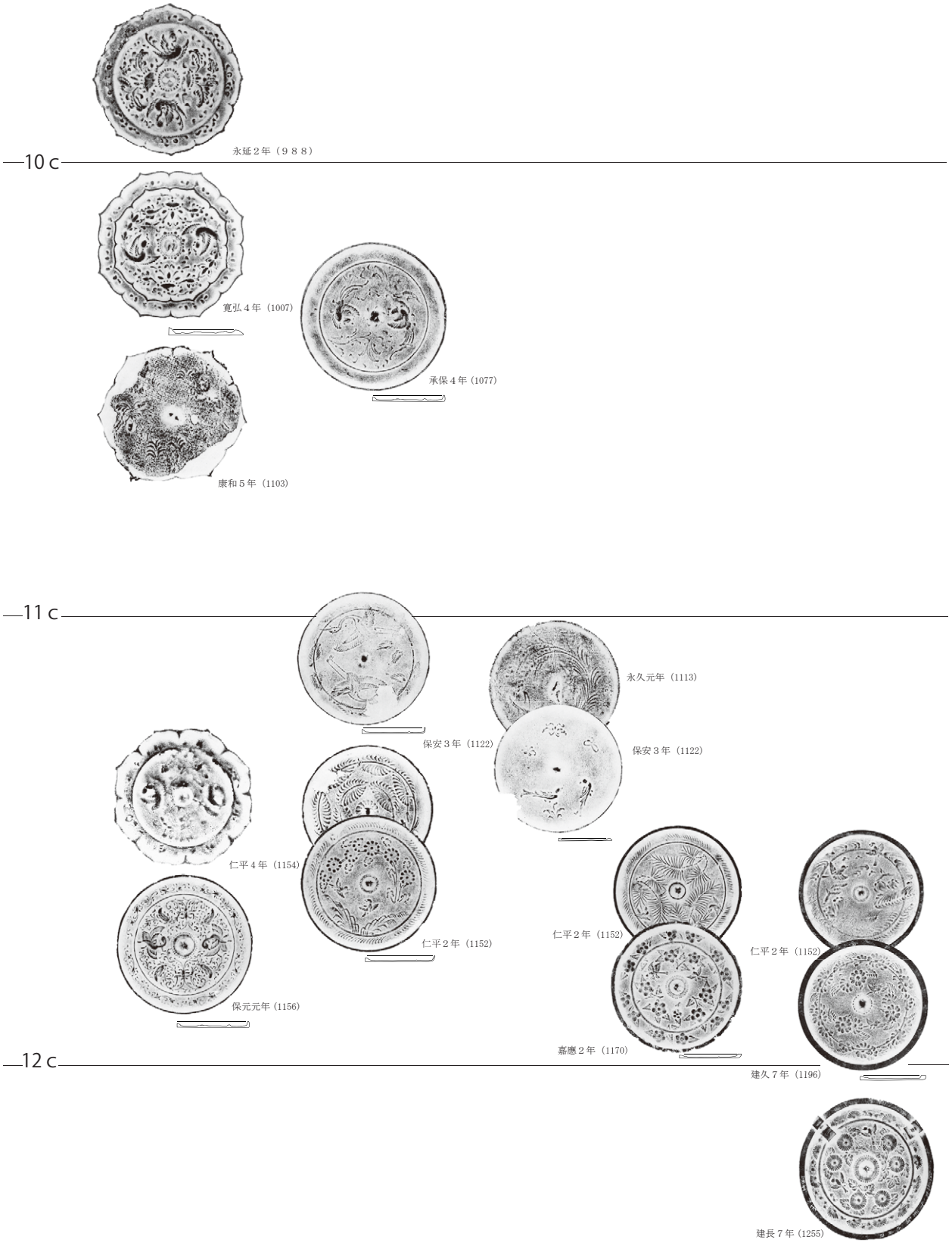


図 24　和鏡の変遷（10c 末～ 13c 前）

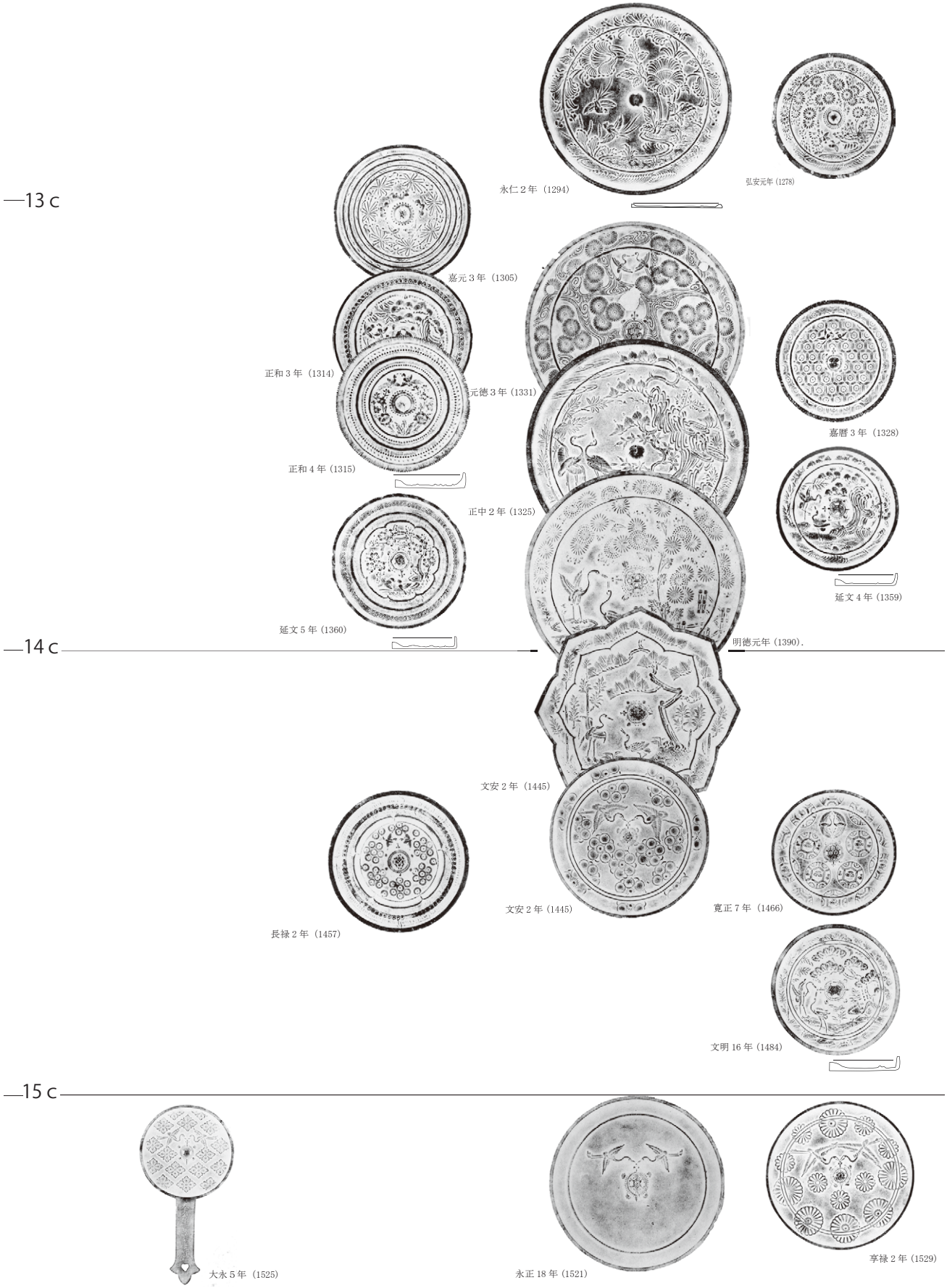


図 25　和鏡の変遷（13c 後～ 16c 前）

天正 16 年（1588）

文禄 3 年（1594）

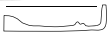
永禄 12 年（1569）

天文 22 年（1553）

—16 c

慶長 5 年（1600）

慶長 14 年（1609）



—17 c

図 26　和鏡の変遷（16c 後～ 17c 前）

中世伊豆諸島における信仰と鏡

三嶋伊豆国は、『延喜式』に登載される式内社が濃密に分布することで知られる。伊豆を代表する三嶋神は三宅島富賀神社から静岡県下田市の白浜神社を経て、同県三島市の三島神社に勧請されたとされる。15 世紀中頃までに成立したと考えられる『三嶋大明神縁起』(『三宅記』) には、伊豆諸島の創造や大蛇退治物語、壬生家が大明神の「御大官」になった由来が記されている。『三宅記』では、三嶋大明神をはじめとする数多の神々が石神となっていくことが記され、それを傍証するかのように伊豆諸島には積石塚や岩を祀る遺跡が多見される。積石塚は、12 世紀後半頃から造営が始まり 15 世紀頃まで継続する。伊豆諸島に於ける夥しい和鏡の偏在性は古くから注目されてきた。特に近年では、國學院大學海洋信仰研究会が当地域に於ける鏡信仰の諸相を次第に解明しつつある。その成果によると、諸島全域では 300 面以上もの鏡が確認され、更に内 190 余面（大島 6 面・利島 60 面・新島 13 面・式根島 3 面・三宅島 99 面・御蔵島 9 面）が中世の出土・伝世鏡であることが判明している。また、特に利島に於いては、和鏡を伴出する中近世祭祀遺跡群の存在を学術調査によって明らかにするという成果も上げている。伊豆諸島出土和鏡の内、出土状態が記録されたものは三宅島坪田中郷第 3 号遺跡以来皆無であり、利島の事例は鏡信仰に関する学術的価値を多分に有するものと言える。

大島

【和泉浜Ｂ遺跡】

三原山の西麓にあたる緩やかな緩傾斜地海際に立地する。1990 年に本調査がおこなわれ 6 基の積石塚と配石遺構、陶器埋納遺構等が検出されている。遺物は 12 世紀後半〜 16 世紀に比定される常滑・瀬戸美濃 ・貿易陶磁などの焼物と鎌・釣針・釘等の鉄製品、双孔儀鏡・古銭等の銅製品が検出されている。祭祀遺構と考えられるのは方形に溝で区画されたエリアに構築された積石遺構群で、陶磁器、金属製品等が混在して検出されている。双孔儀鏡は利島に所在する阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡で特徴的に検出されている遺物と同様のものである（註 19)。

利島

【堂ノ山神社境内祭祀遺跡】

社殿改築の折、敷地より平安中期から室町時代にわたる和鏡 18 面が出土し、また神社前の都道拡幅工事の際には更に 10 面の和鏡も発見されている。堂ノ山神社境内祭祀遺跡の発掘は、これら祭祀の痕跡を明確化したと言えるであろう。遺構に関しては、タブの樹を巡る様に 5 基の集石遺構と甕を中心とする遺物集中区が検出され、集石遺構は 4 種に分類された。その内訳は、「①小礫を充填した溝状遺構・②板状節理片の石材を使用し、桝形を組み、その中に小礫を充填した遺構・③板状節理片を桝状に組み上げた遺構④大型の板状節理片・礫を混在した不規則な遺構」である。出土遺物は壺甕・鉢などを主とした陶磁器類に、和鏡 5 面・双孔儀鏡 42 点・目抜金具・笄・銭貨などの銅製品、刀子・和釘・鎌・釜などの鉄製品、砥石などである。遺物年代から、遺跡の形成は 12 世紀後半に始まり、15 世紀台に最も遺物量が増加、16 世紀後半には終焉すると考えられる。長期的祭祀行為の中で、集石や小祠状施設が廃絶と復興を繰り返しながら次第に規模を増していった状況が看取される（註 20)。

【阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡】（写真 27）

平成 10 年から調査を実施してた。遺跡からは板石で高さ１ｍ程に構築された東西に延びる壇状積石遺構と、その前庭部の拳大の玉石を敷き詰めた遺構面、及び下層の小祠群５基が検出されており、総体としては基壇状を呈している。遺跡は島神である阿豆佐和気命の御陵・旧本宮が鎮座する南西部に向いており、その遥拝所であった可能性が高い。遺物組成は中世常滑・渥美などの壺甕・鉢類を中心に、近世陶磁器・古代から中世末の和鏡 34 面・双孔儀鏡約 400 点（含破片）・宋銭や偽銭などの銭貨・鎌型鉄製品・刀身・笄などの金属製品から構成される。

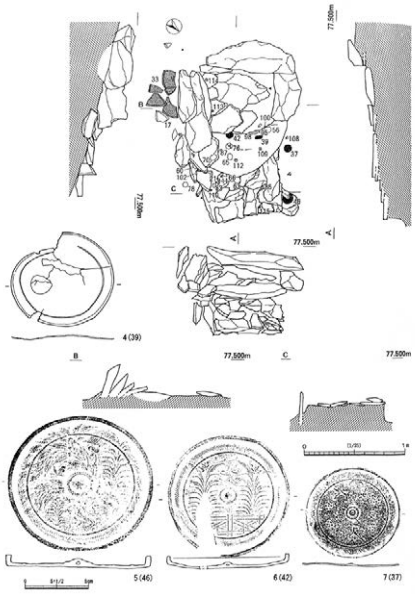


図 27 2 号小祠

写真 27　阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡（利島）

壇状積石に関しては、その下層で 12 ～ 13 世紀の常滑甕や東播系壺が伴出しており、次第に時期の下る遺物が積石内に混入していく。前庭部に於いては、下層の小祠群検出層で中世前期頃の遺物相に収束するのに対し、上層の玉石検出面では中世中期から近世の遺物が混在している。以上の様相は、中世初頭には開始されていた小祠群に於ける祭祀が中世半ばに一旦断絶、形態を変え再び復興していったことを物語っている。また当遺跡に於ける鏡の出土状況も注視される。即ち、壇状石積の隙間に柄鏡を含む１６面もの中世鏡が一括に奉献されていたのである。この一括奉献にて鏡を伴う祭祀行為は終了する（註 21）。

【八幡神社境内祭祀遺跡】

平成６年の本殿改築時に、下層の板石と上層の円礫からなる集石遺構が検出され、和鏡５面・儀鏡・銭貨・中世陶器などが発見されている。５）続く平成９年には同地点付近の範囲確認調査６）が実施され、玉石からなる集石及び中世の壺甕・鉢類・古銭・銅製双孔儀鏡などの遺物が出土している。また近世ではあるが、２点の常滑壺を中心とした祭祀行為の痕跡も検出された。更に時期不明ではあるが刀剣が出土しており、祭祀主体者に在島民だけでなく帯刀身分の者の存在が指摘されている（註 22）。

御蔵島

【神ノ尾遺跡】

里地区に所在し、集落東方にある遺跡の周辺には北西と南北方向に広がる小丘陵に 11 基の集石遺構が認められる。中世墓である１号遺構以外、入念な調査にも関わらず遺物が検出できず、その帰属年代や性格についての詳細は不明である（註 23）。

三宅島

【坪田第３積石遺構】

三宅島には二宮神社、御笏神社などの延喜式内社を中心に多数の和鏡が伝世していることは知られていたが、それらの和鏡がどこからどのような状況で検出されるのかについて明らかになっていなかった。しかし、昭和 31 年、後藤守一氏らによる学術調査で坪田に所在する積石塚から明らかに積石に伴う和鏡の検出例が報告された。和鏡が検出された第３号積石遺構は緩斜面上に構築された東西 2,2m 、南北 2,4m、高さ 0,8m を測るもので、その北端部より鏡背を上にした状態で菊花双雀鏡（13 世紀）が検出された。同類の積石塚は三宅島に１０ヶ所以上所在し坪田の桑原秀雄氏宅の例では 14 世紀の莱方鏡が偶然にも検出されている例などもあるが多くの場合中世陶器片が若干伴う程度である（註 24)。

【中郷遺跡】

昭和 56 年、中郷地区に所在し國學院大學古学研究室によって調査がなされたもので３基の積石塚が集中する。浜からあげられた転石と角礫によって構築された１号積石塚からはサンゴ塊・常滑焼片（14 世紀）などが検出されているが、その性格については詳らかではない（註 25)。

八丈小島における近世の祭祀と鏡　（写真 28)

八丈小島　鳥打遺跡・宇津木遺跡八丈小島は、東京の南方海上 287km、八丈島の西約 7.5km に位置し、面積は 3.08km²、周囲 6.5km を測る。近世の祭祀遺跡は、鳥打村ではフノウカ浦の船着き場周辺の浜の平を中心に構築され、宇津木村では南東側の海岸部に向かって大きく突出した舌状台地の突端部を中心に展開する。大きな岩塊を取り囲むように配した扁平な板状節理片の石材を組合せた小祠群や同様の小祠を直線的に配置するもの、あるいは礫を方形に配置しその一辺に小祠を祀るものなどが看てとれる。小祠の中には依り代として柄鏡やガラス鏡が納入されたものや、周辺には神々に捧げた酒や奉献の品々を入れた壺・甕・皿・徳利などの陶磁器が多数見受けられ、年代的には江戸時代前期から昭和時代に至る遺物が混在していることから継続年代の目安となっている。これらの祭祀遺構は、八丈・青ヶ島特有のものと言っても過言ではない。

写真 28　八丈小島　鳥打遺跡　ご神体として祀られる柄鏡（16c 末）

近世の鏡

16 世紀代には、二重界圏を有する小型、中型鏡に加え柄鏡が登場する。先に記したように大永 5（1525）年の紀年銘を有する愛知県熱田神宮伝来の花菱双鶴柄鏡が出現期に近い段階ものと捉えられる。柄鏡の特徴は、亀鈕双鶴文を中心に二重圏が施され、鏡体と柄の接点に持送りを有するものと無いものがある。柄の先端部の孔を穿ち、多くは平坦であるが古様を示すものには三稜・三花・燕尾形などがある。また、柄に透かしを有するものも認められる（図 28）（写真 29）。鏡背の地は概ね 16 世紀前半から中頃は平地が多く、中頃以降には粗地・石目・布目、末頃には砂目に変化していく。さらに末期には「浄阿弥」・「天下一」銘等を陽鋳するものが現れる。文様の多くは下方に松竹を生じた洲浜を描いた蓬莱図が多く、家紋や菊花散、植物文なども散見される（写真 30）。

図 28　16c の柄鏡

17 世紀に入ると円鏡は重厚な作風のものと界圏の無い絵画的文様構成をとるタイプに分かれると同時に、その主流は柄鏡となってゆく。特に初期の柄鏡は鏡背面に残る鈕が外され、鏡背面全体をキャンバスに絵画的文様が描かれ、素朴な動植物や人物などが描写される（写真 31）。また、「天下一」「天下一作」等の銘に加え前半頃には、「天下一若狭」「天下一但馬」「天下一佐渡」などの受領国名を刻んだ鏡工の名が出現し、面径も六寸程度の中型鏡や八寸を越える大型鏡も散見されるようになる。地は砂目が一般的となる。17 世紀も後半になると鏡面の大型化につれ鏡背文様にも人物・動植物・器物・家紋・幾何学的図様など多様なバラエティーが認められるようになる（写真 32）。幕府は天和 2（1682）年に「天下一」銘の禁令を発したことによってその使用が自粛されることとなったが、さほど間をおかずに再開される。この頃から何代かにわたる世襲による鏡工の存在（工房）などが知られるようになる。

18 世紀になると 5 寸以上の鏡が量産されるとともに 10 寸を越える大型鏡も登場すると共に踏み帰しによる量産化が図られるようになる。鏡背文様としては家紋や文字の入ったものなどが特徴的であり（写真 33）、絵画的文様も前期のものに比べ平坦な作風のものが多くなり、18 世紀後半以降は、今日的視点からすれば工芸品として精彩を欠くものが多くなる（写真 34 ）。その主たる文様は定型化した蓬莱文となってゆく（写真 35 ）。

写真 29　16c 中　　写真 30　16c 末　　写真 31

写真 32　17 末　　写真 33　18c 前半　　写真 34　18c 後

写真 35　19c 前半

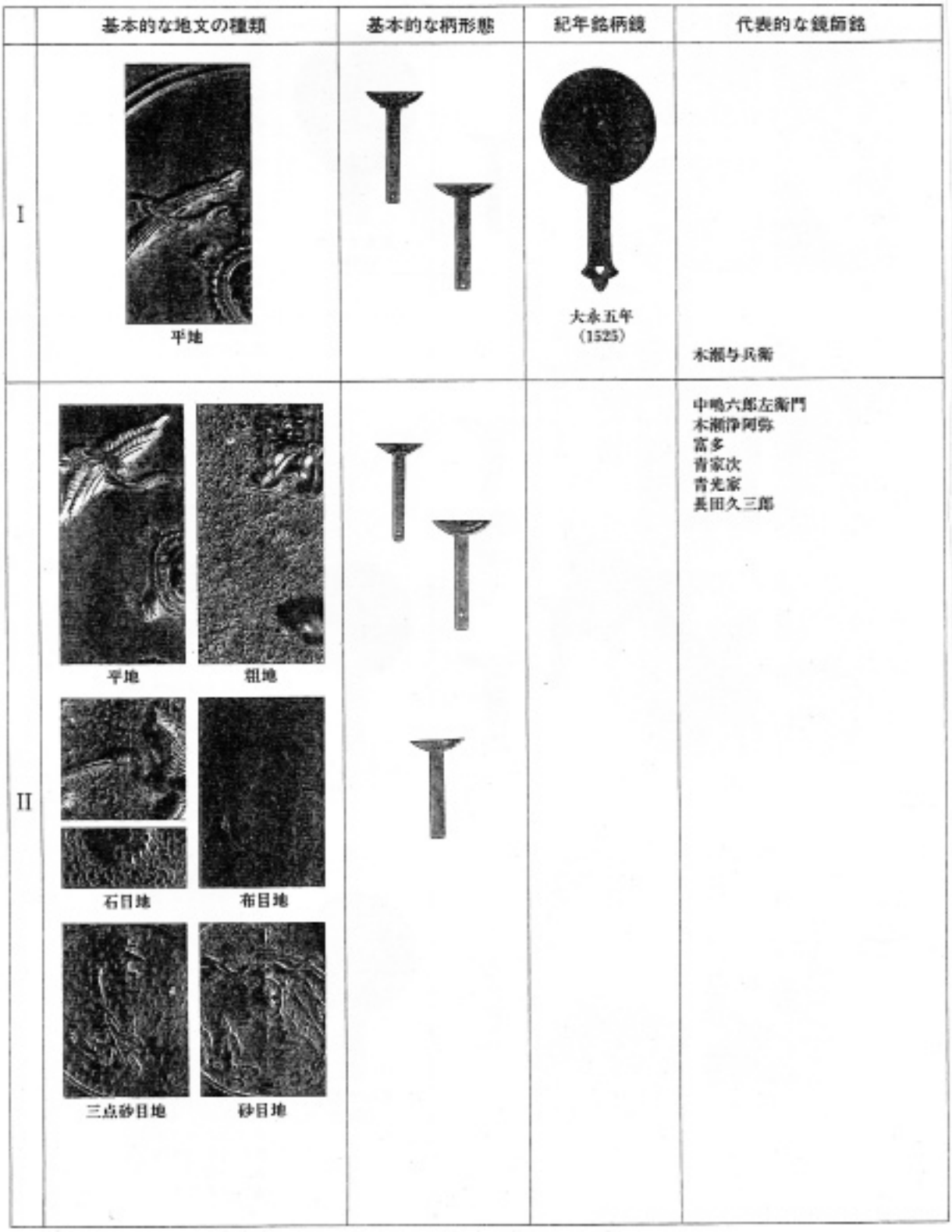


図 29　柄鏡の変遷（１）

青木豊・内川隆志編著　1994 『柄鏡大鑑』 ジャパン通信社より

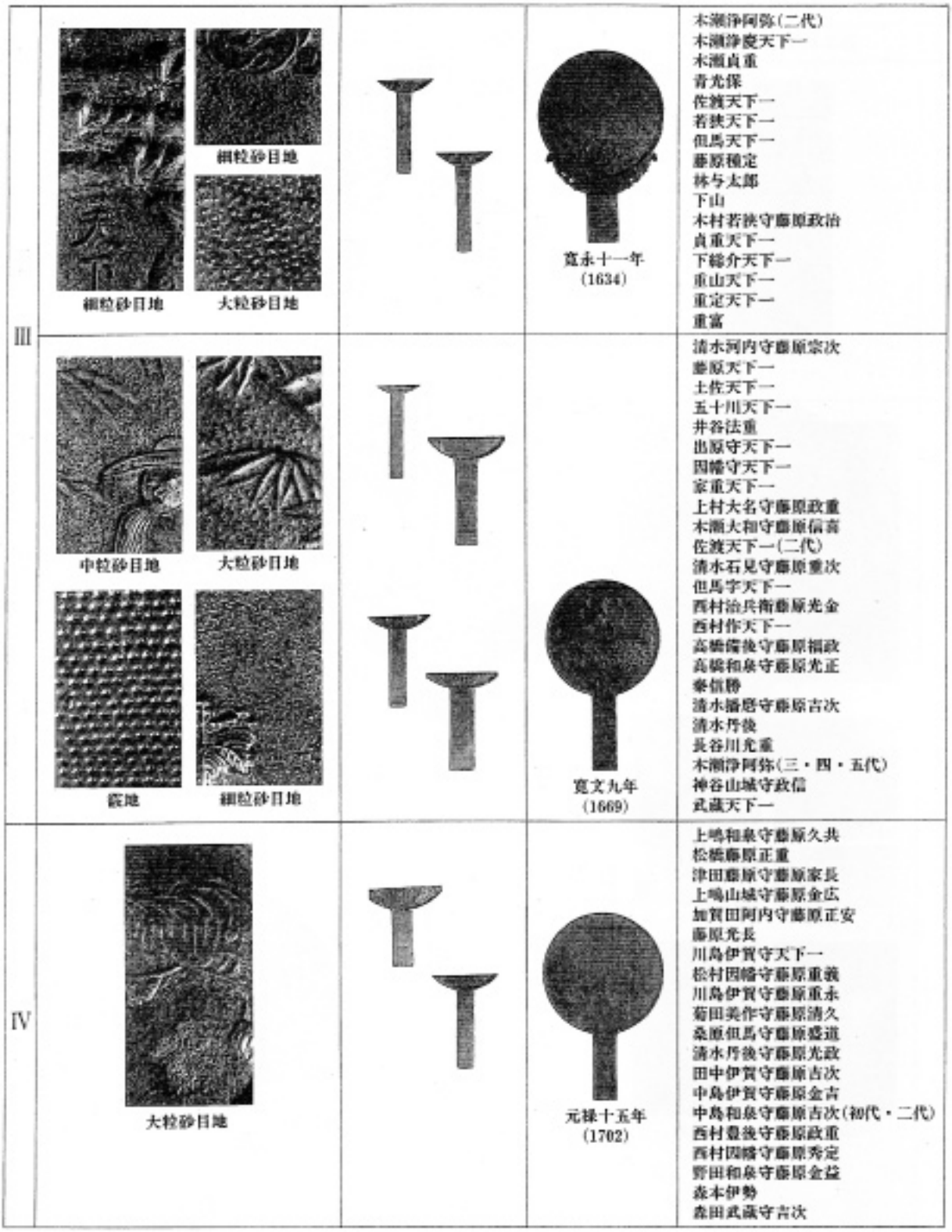

Ⅲ
細粒砂目地
細粒砂目地
大粒砂目地
寛永十一年
(1634)
木瀬浄阿弥(二代)
木瀬浄慶天下一
木瀬貞重
青光保
佐渡天下一
若狭天下一
但馬天下一
藤原種定
林与太郎
下山
木村若狭守藤原政治
貞重天下一
下総介天下一
重山天下一
重定天下一
重富
中粒砂目地
大粒砂目地
藍地
細粒砂目地
寛文九年
(1669)
清水河内守藤原宗次
藤原天下一
土佐天下一
五十川天下一
井谷法重
出原守天下一
因幡守天下一
家重天下一
上村大名守藤原政重
木瀬大和守藤原信喜
佐渡天下一(二代)
清水石見守藤原重次
但馬字天下一
西村治兵衛藤原光金
西村作天下一
高橋備後守藤原福政
高橋和泉守藤原光正
泰信勝
清水播磨守藤原吉次
清水丹後
長谷川光重
木瀬浄阿弥(三・四・五代)
神谷山城守政信
武蔵天下一
Ⅳ
大粒砂目地
元禄十五年
(1702)
上嶋和泉守藤原久共
松橋藤原正重
津田藤原守藤原家長
上嶋山城守藤原金広
加賀田河内守藤原正安
藤原光長
川島伊賀守天下一
松村因幡守藤原重義
川島伊賀守藤原重永
菊田美作守藤原清久
桑原但馬守藤原盛道
清水丹後守藤原光政
田中伊賀守藤原吉次
中島伊賀守藤原金吉
中島和泉守藤原吉次(初代・二代)
西村豊後守藤原政重
西村因幡守藤原秀定
野田和泉守藤原金益
森本伊勢
森田武蔵守吉次

図 30　柄鏡の変遷（２）

	 細粒砂目地		 宝永三年 (1706)	藤原重永 吉次天下一 藤原光永
V	 細粒砂目地(踏み返しによって砂目が鮮明でない) 細粒砂目地(同上)		 文政十三年 (1830) 安政三年 (1856) 安政五年 (1858) 文久元年 (1861)	兼良 佐久目 中島和守藤原吉次(三・四・五代) 家業天下一 伊貝光吉 岩崎和泉守藤原貞政 恵来源教睦 岸本武蔵掾吉孝 同吉次 山城住人清次 同吉次 和田藤原好兼天下一 津田和泉守藤原吉長 中原摂津守藤原光重 藤原金次 藤原重永 藤原政重 藤原光永 松村因幡守藤原吉次 和田藤原好兼天下一 青山吉信 木村若狭守藤原 藤原宗次 西村豊後守藤原政重 駒井山城守清次 近藤政善

図 31　柄鏡の変遷（3）

魔鏡

魔鏡とは鏡面に光を反射させると鏡背面もしくは内部に鋳込まれた図像が写しだされる現象を示す鏡で、唐代に編まれた『古鏡記』には、前漢時代の照明鏡が「透光鏡」として記されている。日本では、幕末明治期に特に目立って製作され、明治7（1874）年開成学校の化学教師であったロバート・アトキンソンが1877年5月に『Nature』に魔鏡現象に関する論文を投稿、国内でもその奇異なる現象に注目する科学者も認められた。昭和初期に神奈川県大磯町のエリザベス・サンダーホーム沢田美喜館長が十字架に架けられたキリスト像の魔鏡を発見し、隠れキリシタン遺物として公開されたのが最も世に知られているものであろう。服部コレクションには、7面もの魔鏡が含まれており、その希少性は言うに及ばず実際に鏡面から放たれる幻想的な画像は、見る者を驚嘆させる。

図32　魔鏡（19c）國學院大學博物館蔵

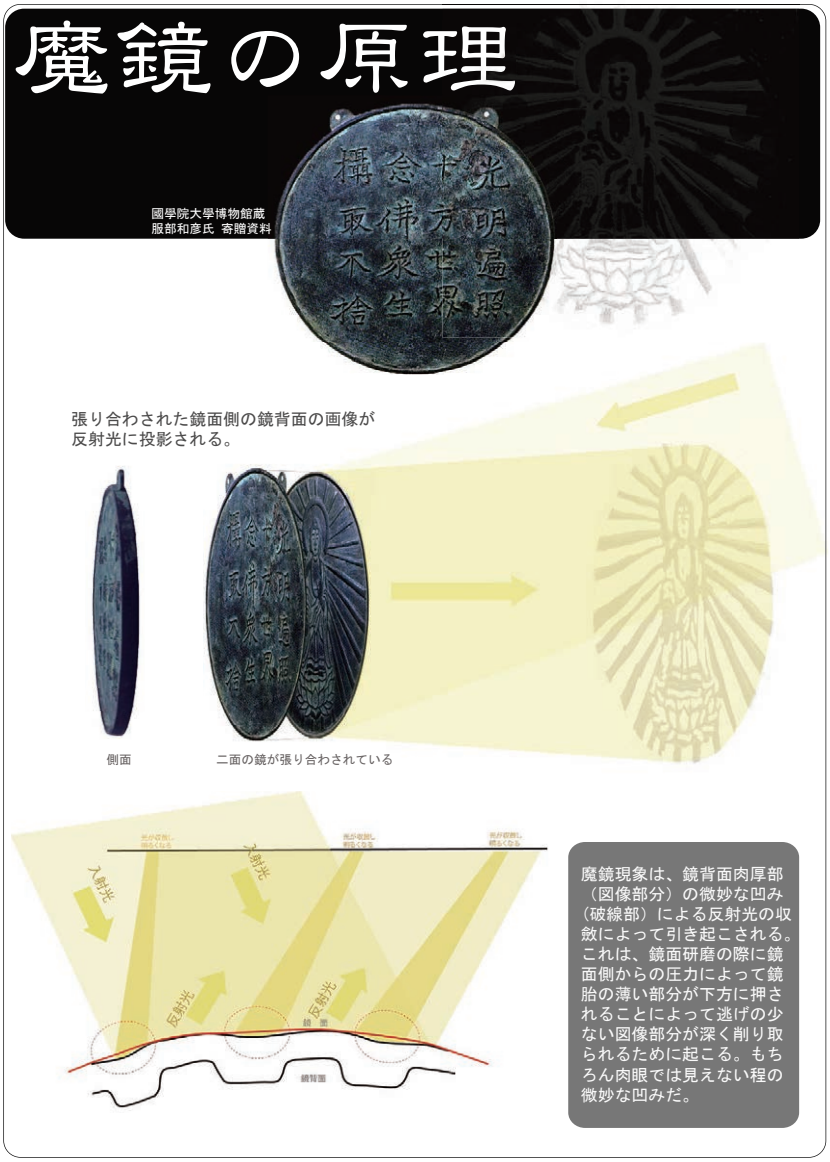


図33　魔鏡現象のメカニズム

おわりに

以上、鏡という一つの信仰の道具の受容と展開について通史的にみてみた。姿見としての実用的側面と共に、人々はその呪力を信じ遺体や経巻の僻邪の具として、荘厳や神仏の依代としてあるいは神仏へ献げる宝物として多様な社会的機能を付加されてきたのである。工芸品としても魅力あるものとして評価することも出来る。考古学的には、出土鏡が研究対象であり、全国的に北海道から沖縄まで多数の発見例が知られている。これらの整理に加え、伝世紀年銘鏡を集成、整理し詳細な型式編年の構築が今後の研究課題と言えよう。

註

(1) 西川寿勝　2003 「東アジアの鏡と倭の鏡」『鏡にうつしだされた東アジアと日本』鋳鏡研究会監修・西川寿勝・久保智康編著　ミネルヴァ書房　pp. 23-25

(2) 柳田康雄・角浩行　2000 『平原遺跡』前原市文化財報告書第 70 集　前原市教育委員会

(3) 大川磨稀　1997 「鈴鏡とその性格」『考古学ジャーナル』N0. 421 ニュー・サイエンス

(4) 大場磐雄　1964 「神道考古学の体系」『國禮論纂』下巻　pp. 29-53

(5) 明石市教育委員会 1996 『明石市文化財調査報告』第 2 冊　明石市立文化博物館編

(6) 相模原市　2010 『勝坂有鹿谷祭祀遺跡資料報告書』相模原市史調査報告書 6　相模原市

(7) 亀井正道　1966 『建鉾山』吉川弘文館

(8) 大場磐雄 1967「上多賀宮脇遺跡」熱海市史編纂委員会『熱海市史 上巻』熱海市役所
　小野真一 1972「上多賀宮脇祭祀遺跡」熱海市史編纂委員会『熱海市史 資料編』熱海市役所

(9) 杉山博 『古代の鏡』日本の美術 No. 393 至文堂

(10) 日光市 1963『日光男体山－山頂遺跡発掘調査報告書』

(11) 吉田恵二他 1987『吹ノ江遺跡』新島本村教育委員会

(12) 大場磐雄　1967 『まつり』学生社

(13) 前田洋子　1984 「 羽黒鏡と羽黒山山頂遺跡 」『考古學雑誌』70－1　日本考古学

(14) 松戸市立博物館　2001 『中世の東葛飾』松戸市立博物館（担当中山文人）p. 20

(15) 静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010 『堂ヶ谷廃寺　堂ヶ谷経塚』平成 17 ～ 21 年度　静岡県単独空港整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　静岡県埋蔵文化財調査研究調査報告書第 219 集

(16) 久保智康 1999『中世・近世の鏡』日本の美術 No. 394 至文堂 p. 20

(17) 筆者らの実見にでは山宮神社蔵鏡については、唐式鏡・和鏡・中国・朝鮮鏡など 86 面もの鏡が奉納されており、年代の不確かな多数の中国・朝鮮鏡が含まれている。

(18) 内川隆志　1997 「柄鏡の出現をめぐる諸問題」『國學院大學考古学資料館紀要』第 13 輯　國學院大學考古学資料館

(19) 永峯光一・米川仁一 1991『東京都大島町和泉浜Ｂ遺跡発掘調査報告書』

(20) 青木　豊・内川隆志他 1994『伊豆利島　堂ノ山神社境内祭祀遺跡』東京都利島村教育委員会

(21) 青木　豊・内川隆志・須藤友章他『阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡』利島村・國學院大學海洋信仰研究会

(22) 八幡神社境内祭祀遺跡発掘調査団 1999「伊豆利島　八幡神社境内祭祀遺跡」『國學院大學考

古学資料館紀要』第 15 輯國學院大學考古学資料館
(23) 神ノ尾遺跡学術調査団 1992「御蔵島　神ノ尾遺跡」『國學院大學考古学資料館紀要』第 10 輯國學院大學考古学資料館
(24) 後藤守一・梅沢重昭 1958『伊豆諸島文化財総合調査報告』 東京都教育委員会
(25) 吉田恵二他 1984『中郷遺跡』國學院大學文学部考古学実習報告第 4 輯集　國學院大學考古学研究室

印旛郡市文化財センター第 18 回遺跡発表会　講演資料

鏡と信仰 － 和鏡の成立と展開 －

2014 年 7 月 26 日　内 川 隆 志